
けいおん！ -My story-

ハーツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ — My story —

【Nコード】

N2475W

【作者名】

ハーツ

【あらすじ】

過去にある出来事を抱えながら、その少年は新たな高校生活を繰り広げていく。

今回が初投稿なのでいろいろと間違ってる部分もあるでしょうがそれでも良いという方はよろしく願います。（あとこの小説はありきたりな共学パターンです）

プロフィール（前書き）

あまり更新頻度は早くありませんがよろしく願います。

プロフィール

オリキャラ紹介

古川 龍斗
ふるかわ りゅうと

誕生日…11月ごろ（日にちはちよつとまだ（汗））

身長…168cm

体重…54.9kg

全体的にはとある魔術の禁書目録の一方通行に近い容姿。

髪の毛は黒色で原作一方さんより少しさっぱりしていて、目の色も普通。

体系は普通より少し細いが、鍛えてはいるので細マッチョ。

今作の主人公。

中学前半までは比較的普通の性格だったが、ある出来事から感情をあまり出さなくなった。

と言っても喜怒哀楽の「怒」と「楽」は普通の生活では出している。

ある程度人前では普通にしてるが、大半の人間は信用していない。

喧嘩は数回しているためある程度殴り合いには慣れている。

渉と悠二とは小学生からの付き合い。

坂本 渉 さかもと わたる

誕生日…7月ごろ

身長…170 cm

体重…56.7 kg

顔は中の上。中立的だけど性格からか爽やかタイプ

バカテスの久保 利光にある意味近い。

体系は今まで委員会にいた為に部活はしていないので、標準。
しかし空手を少しやっているので普通の人よりは強い。

助けを求められると状況によっては手助けする。

結構きちんとしてる。

それゆえに委員長キャラで、だいたいクラス委員長は渉。

龍斗のことを最も知っている数少ない友達。

源 悠二
みなもと ゆうじ

誕生日 8月ごろ

身長 171 cm

体重 57.3 cm

今まで運動ばかりしてたため体系は普通ながらもガツシリしている。

顔は上の下のあたりで、結構きっちりとした顔立ち。

髪は運動に邪魔にならないようにとミディアムショートで茶髪。

この三人の中で最もテンションが高く、お気楽な性格

男女関係なく話せるため結構好かれているタイプ。

龍斗には何故かMになる。

一 1 一 (前書き)

間違いなどがあったらすいません。

「はぁー・・・めんどくせえ・・・」

「入学式日初っ端からそんなこというなよ。記念すべき日じゃないか？」

「そうだぜ龍斗！最初のイメージで今後の高校生活が素敵なものになるか、

すばらしき青春もなく永遠にゴットハンドを守り続けるかが決まる
「黙ろうか??」・・・すんません。」

今時刻 7..58

一緒に登校している二人のうち悠二が周りに生徒がいるなか・・・
てかほとんど女子だけど、
なんとなく意味はわかる下ネタを無駄に大きい声で話している。

俺らからしたら迷惑以下の何者でもない。

やはりこちらもそう思ったのか渉が威圧感を出しながら止めた。

近くで、桜が咲いている。

4月上旬。

今俺達は新たな高校に向けて小学校からの親友二人と登校している。

1人は坂本 渉

多分俺らの中ではまあまあ真面目なほう。

こいつは結構頼れるいわゆる委員長キャラ見たいなもんだ。

もう一人は源 悠二

まあ簡単に言えば変態

普通に言えばよくいるいじられキャラ?・・・いや面白い?

どっちでもいいかめんどくせェし。

今からいく高校は去年まで女子高だった「私立桜ヶ丘高校」

共学にはなったがやはりまだ女子のほうが断然多い。

ちなみに受験理由は3人とも家から近かったため。

・・・話を戻そう、

正直朝起きるのもめんどくさく、登校するのもめんどくさかったので入学式をサボるという快挙でもしようとしたはずだったか・・・

くとある朝

起床7:00

自分にしてはまあまあ早く起きた。

だがいつものお供の如く眠気も共に存在していたため

渉が無駄な心配をしているなか、

案の定クソ（変態）がドアの下付近で頭を抑えながら悶えていた（笑）

「おい！？今無表情で絶対笑ったろ！！！？？」

「っチ、アホの癖に無駄に勘のいい奴だなオイ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（TAT）」

（ああ、こんな見たくもないもの見ると）

「昨日潰して体液出たゴキブリ思い出すから泣くな・・・」

「俺ってゴキブリの体液と同等？」

「いやそれ以下だ」

ただ今7時20分ごろ。

太陽という名の熱の塊から放たれる眩い光が差し込むこの時間に、

俺の家の玄関の前で悠二が文字で言うorzのポーズをしてすすり

泣いている。

（正直こんなシュールな光景朝から見る俺って・・・）

そこにさすがにやりすぎたかと思ったのか渉が止めに入った。

「りゅう、朝から攻めてあげるな。さすがに可哀そうだ」

「そうだな、俺も気分が・・・それより朝っぱらから何のようだ？俺は寝ていたいんだが？」

とりあえず話を軽く切り替えて何故来たのかを聞くことにした。

渉は笑いながら

「どうせ龍斗のことだ。めんどくさいか眠たいかでサボるつもりだったんだろ？」

こうして龍斗は2人によって連行されられて今に至る。

そして今、桜が咲くこの道を進みながら俺は

（めんどくせえな学校・・・爆破しねえかなア？）

新入生とは程遠い思考で、校門をくぐる。

一 2 一 (前書き)

ちよくちよく文を変えるかもしれません。

現時刻 7..59ごろ

目の前に校門が見えてきたあたりで俺たちは・・・

「にしてもわかってはいたが、今回もサボろうとするとわな」

「俺には老年野郎共の話を聞くことに意味があるのか聞きてえよ・・・」

「まあそれでこそ龍斗だよなー。期待を裏切らない！」

そういうながらバカが龍斗に対してサムズアップしてきたので

「お前の期待なんて価値のないものを渡してくるな虫唾が走る」

「無表情でさっさとやらないでくれませんか!？」

とりあえず右から左へ受け流して捨てていた。

今俺たちの目の前にはそれなりに立派な校舎が見えている。

周りも私立だからが無駄に豪勢で広々としていて、私立としては申し分なかった。

（私立なだけはあるな・・・いやだからってこれは）

「広!?! 何ここ前の中学とは比べ物にならねー!!」

「そういえば二人は体験入学来てなかったな？」

「・・・ああ。近ければなんでもよかったからな」

以前、桜ヶ丘高校の体験入学があったのは知っていたが、俺はめんどくさくて、悠二は集合時間に間に合わず行けなかった。

で、真面目な渉はある程度の高校に体験入学していたのでほとんど受験関連は渉から聞いていたという。

「まさかこんなに綺麗な高校とは思わなかったぜ・・・!」

「じゃあとりあえずクラスを確認しに行こうか」

高校にちよつと感心してからクラスを確認しに行こうとしたとき

「はあーはあーはあー・・・あれ？時間見間違えたー！！！」

後ろから不審者さながらな女子の息づかいと叫び声が聞こえたので振り向いてみた・・・

が、ここで振り向いたことが間違いだったと後で後悔するのはまた別の話。

とりあえず現状を理解するため内緒話を開始することに。

（なあ渉？この子は誘ってきてるのk「その思考をどうにかしようか？」・・・ハイ）

（とりあえずよお？俺は関わりたくないから早く行かねえか？）

（でもなんか事情があるみたいだし少しは聞いてあげないか？）

（お人よしだなオイ。・・・まあ好きにしろ）

（じゃあ聞いてみるよ）

とりあえず内緒話を終えた俺たちはその女子に何故叫んだのか聞いてみることに。

「ねえ君？何でこんな真ん中で叫んでるんだ？何かあったのか？」

「え？・・・あ、あのね！、時間をね、見間違えてね、早く来」とりあえず落ち着いてから答えようよ」

よっぽど急いだのだろうかかなり疲れているらしく、さっきから途切れ途切れの会話になっている。

（・・・なんかこの女に関わらないほうがいいと勘が）

「実は時間を見間違えてこんなに早く来ちゃったんだよねーアハハハハ・・・」

「それはまあ・・・ドンマイ」

それしか言えないのはわからなくはねエ。

「あ、せっかくあったんだし自己紹介しようよ！私の名前は平沢唯だよ！」

「俺は坂本 渉。んで後ろの二人は・・・」

渉は普通に、

「源 悠二！よろしくな！」

悠二は無駄にテンション高めで、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は無視した。

「龍斗？」

「・・・なんで知らないやつに個人情報与えなきゃならねエ？」

「龍斗？・・・・・・・・じゃあ『りゅうくん』だね！」

この瞬間、俺の思考が5秒ほど止まった。

（ハ・・・？あだ名？初対面で・・・何だこいつ馬鹿なのか？）

・・・・・・・・あとの二人うちのバカが笑っているのは今は放置しよう。

「……『りゅうくん』って何だよ？」

一応少しはわかるが説明を求めることにした。

が、帰ってきた返答は

「え？ 龍斗だがらりゅうくんなんだよ？」

……まったく説明になっていなかった。

／＼そのころの二人／＼

「龍斗？ ……じゃあ『りゅうくん』だね！」

もちろんこの二人にも何かしらの衝撃が来ていたわけで

（おいおいおいおい！？ 『りゅうくん』って何だよW！？）

「アヒアアヒハハハアハッハアハははやべ／＼龍斗にあわね／＼！！！」

龍斗がフリーズ中に彼のことを知っている二人は、
そのあだ名とイメージがまったく違うことに片方は少し追いつけず
もう片方は何か引つ掛かったのか爆笑している。

だからだろう。姿は変わらずともドス黒いオーラを今にも現実^{リアル}で出
せるのではないかというぐらいにイラついている龍斗をすぐに危険
視できなかったのは。

【なアオイ？お前は五体不満足になるぐらいの覚悟の上で俺を笑っ
てるんだよなア？】

「ひっ……！！？？りゅ、龍斗、待て話せばわか」

そのさきが続くことはなかった。ただ、悠二が最後に見えたのは・

（あ、何だろう〜これ走馬灯かな〜？アハハハハh）

記憶のフラッシュバックと目の前にある拳だった。

「じゃあとりあえずクラスを見に行こうか？」

「・・・・・・・・・・アア、サツサトカエリテエカラナ」

「あ、私も行く〜♪」

「じゃあ一緒に行こうか。もちろん『りゅうくん』もだぞ」

「・・・・・・・・・・カエリテエ」

今の俺には、もう体力も精神力ももぬけの殻のようだった。

（行くしかないか・・・・・・・・・・てかあの・・平沢だったか？あいつ天然かバカか・・・・・・・・いやどっちもだなありや）

さっき制裁を加えた元人間ガラクタの体を引きずりながら歩いていく。

— 3 — (前書き)

軽音部までが長い・・・

今俺たちはクラスの確認のためにクラス表を見ているわけだが

「俺の輝く高校生活を始めるに相応しいクラスはどこだ!？」

アホがものすごい希望を持ちながらクラス表を凝視してる。

・・・何故だろう? ツブシタクナル。

「ありえないから変な創造膨らますな・・・ (マジひく)」

「拒否りながらひくなよ!! いいだろ考えるくらい!？」

「そうだよ? 甘いものいっぱい食べたいと思ってもいいんだよ」
♪

「おお、唯ちゃん! 君はわかってくれるんだな!」

「それは創造ってより願望の間違いだろバカ共・・・」

もちろん同類^{バカ}で意気投合しているからか俺の話を聞いているはずもなく・・・

そんな時に見に行っていた渉がこちらに戻ってきた。

「どうだったよ渉？ 誰か一緒の奴はいたのか？」

「それがな龍斗？・・・俺らみんないっしょのクラスだったぞ！」

うれしいのか、いつもよりもテンションが上がっているところ悪いが

「・・・なあ？ それはまさかあの女もか？」

『俺らみんな』とは平沢も入っているのか聞いてみた。

できれば違うことを願う。

「そりゃ入ってるに決まってるだろ？ 何言ってるんだよ龍斗？」

・・・何だ？ 俺だけがあいつ（平沢）が馴染んでる事を変に思うのか？ そうなのかオイ？

（教室内）

「まさか俺たちや唯ちゃんともいっしょとはなー・・・なんか感動！」

「そうだな。俺はみんなといっしょでうれしいよ。なあ龍斗？」

「ハア・・・騒がしくなりそうだなオイ。」

主に平沢と悠二が合わさると。

「それにしても和ちゃんもいるなんて思わなかったよ！」

「唯？クラス表見てないの？」

「見たはずなんだけど・・・なんでだろうね？」

「・・・私が聞きたいくらいよ」

ちなみに平沢はさっき新たに知り合った真鍋とかいう奴と話している。

まあ知ったことではねエか。

そんなことを考えていると予鈴と思われるものが鳴り出し、この担任と思われる先生が入ってきた。

「まずは入学式ですので皆さん廊下で番号順に2列で並んでください。8時35分ごろに式場の講堂に移動します」

いきなり入学式かよ……。萎える……。

「涉、龍斗、唯ちゃん、和ちゃん。……。やられるなよ（睡魔に）」

「いや悠二こそ寝ないで聞いとけよな？」

「知るかよ……。勝手に寝かせてもらう」

「え？高校の入学式って危険なの！？」

「違うから安心しなさい。ようは寝るなってことよ、唯」

案の定、龍斗が堂々と、悠二がやられて寝ていたことをいうまでもないだろう。

ちなみに入学式中、龍斗の両側には涉と唯がいたのだが

「龍斗も仏教面しないでこうやって素直な顔してれば印象もいいんだろうけどな？」

「りゅうくんもう寝てるねー……今のうちに撮っておこうかな？」

「いやシャッター音でばれるし先生たち来るから……」

寝てるときにこんなことがあったとは龍斗は知らない。

一 4 一 (前書き)

ぐだぐだですがどうぞ。

後、感想や文について何か書いていただけるとうれしいです。

入学式を終えた俺たちを待っていたのは

「入学おめでとうございまーす！」

「え？ ちょ！？」

「ぜひテニス部へ！」

「あ、どう」

「ぜひ柔道部へ！」

「何故うけとらなきゃ・・・！？ ポケットに突っ込む」

「ぜひ茶道部へ！」

「ちょっとそんなに詰め寄らな」

「ぜひ書道部へ！」

「「「「ぜひのぜひ！」「」「」」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・なんかすげーこと起きなかった今？」

「俺なんかポケットに入れられまくったぞオイ？」

「d h v b ぢ s ん h h c に あ ん j d j n ?」 ↑まだ脳内整理中

「高校ってすごいねー・・・」

「ええ・・・勢いが違うわね」

嵐のように来て嵐のように去っていく、部活勧誘という名の人員争奪戦だった。

〓一週間後〓

「んで〓結局俺はバスケ部に入りましたとさ」

「いやどうでもいい」

「せめて「そうなんだよかったねー」とか言えねーのかよ!!」

丁度昼休みでパン等も食べ終わったころ、

俺達は部活をどうするかを教室で話していた。

「そういや渉は今回も生徒会に立候補するの？」

「今までの生活上やっぱそれが落ち着くんだよ」

さすがは中学連続生徒会。その功績は伊達じゃないな。

「渉も生徒会に立候補するの？」

「そうだけどー・・・もしかして和も」

「ええ。私も立候補しようと思ってるわ」

どうやらこちらもメガネのせいか合っていると思えてしまう。

「二人とも生徒会って何だがすごいねー！」

「・・・見た目とイメージ通りだなあ」

とりあえずわかったのは、悠二は新しくできた男子バスケット部に、渉と真鍋は生徒会希望。

残るは俺と天然（平沢）の2名か・・・

「龍斗はどうするんだ？」

「部活はめんどいからなあ・・・パス」

「りゅうくんもまだ決まってるの？じゃあ私と一緒にだね！」

「はあ・・・こうやってニートが出来ていくのね」

天然から同類アピールと同時に何か心にグサツと。

「部活やってないだけでニート！？」

どうやら平沢にもダメージがいったらしい。

にしても・・・

「おいましてこれ（平沢）といっしょにするな侵害だ」

「龍斗にも何か衝撃があったんだ・・・」

「振り返ってみると、唯って今までなんの部活もやってこなかったものねえ」

（グサッ！）

「龍斗も興味ないだめんどくさいだで何もやってないしな」

（グサッ・・・！）

「「とりあえず早く部活を探しなさい」」

・・・つまりあれか？

部活に入らなければニート扱い、入れば面倒な部活の始まり始まり
ってかア？

ただひとつ言えることは、

「・・・めんどくせェ」

～数日後～

俺はニート扱いされるのだけは願い下げなので部活の掲示板を見に

来ていた。

「とりあえず暇になったから来てはみたが、どれもめんどくせえ感じだなオイ……」

正直すべてやる気がしない。

（入部しねえとニートか……いつそバイトで逃げるか？）

そんな思考をしていると知っている声が聞こえた。

「りゅうくんも部活探しに来たの？」

「……平沢か。お前も探しにか」

「うん。せっかく高校生になったんだし何か始めなきゃな〜って。和ちゃんにあんなこと言われちゃったし」

やっぱりあの発言は俺と平沢に深刻なダメージを与えたようだった。とりあえず勧誘ポスターを見てみると

「軽・音楽か〜」

「ああ？」

軽音楽？・・・この軽音部のことか。となりで平沢は何かを考えているようだが・・・

「・・・・・・・・よし！」

「・・・・・・・・??????」

訳がわからなかった。

ー 5 ー (前書き)

一日に2話投稿するのってきつい・・・。

「とりあえず、軽音部ってところに入ってみましたー!」

平沢が真面目な顔に片手を上げて堂々と宣言しだした。

「……お前入ったのかよ」

「で、どんなことするの?」

「さあ?」

天然がちよつと本気をだした瞬間だった。

「ええ!?!」

「内容も知らずに入るなんて……唯ちゃん恐ろしい子!」

なんとか天然耐性を持つ真鍋と似たような悠二は反応できたが、俺と渉はすごいような呆れるような……表現できない気持ちに。

「わからないで大丈夫なのか唯？」

「きっと軽い音楽って書くから簡単なことしかやらないよ〜口笛とか」

「「何「だ」そのやる気のない部活・・・」」

真鍋と涉と悠二の思考が重なった瞬間だった。

にしても今日は天然が絶好調だな・・・無駄に疲れる。

「・・・平沢。あの部活はバンドをやるって書いてあったろ？」

「確かに書いてあった・・・あ、バンドって」

「ギターとかを弾くってことだよアホ」

処理時間およそ3秒。

「・・・私ギターなんて弾けないよ!？」

それすらわからなかったのかお前・・・おい見ろ、真鍋すら呆れてるぞ。

「じゃあ何なら弾けるの？」

「うゝん・・・・・・・・うゝん・・・・・・・・カスタネット？」

うんたんうんたんうんたん♪

(・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・)

「・・・・・・・・すごく似合うわ」

「俺も同感するよ」

「俺でもそう思えたぞ!？」

「幼稚園からやり直したほうがいいんじゃない？」

皆それぞれ、思い思いの言葉がでた。

「で、どうするの唯? もう入部届け出したんでしょ？」

「・・・・・・・・・・どうしよう?」

やはり出してしまってからか平沢の顔から焦りが出ている。

「てか何で体験入部しなかった？」

「なんていうか勢いって言うか……アハハハ」

「まあ無理な以上、止めにいかないといけないんじゃないか？」

「うう……一人で？」

「私は生徒会の申請とかあるから……」

「右に同じ」

生徒会グループは用事でダメ

「俺は部活があるし……御免な唯ちゃん」

バカも部活でダメ………っておいまさか

「ジーーーーー」

平沢が捨てられた犬のような目で俺を見てくる。

さながら「助けてください」とても言わんばかりに。

「……まさか俺が付き添えと？なあ渉」

一応助けを求めるが・・・

「龍斗は暇なんだしいいんじゃない？」

「そういう意味じゃねエ！何で俺が親みたいなのこ」

「龍斗。唯をお願いね」

「話聞けエエエエエエ！！！！！！！！！！」

「まあまあ。よかったじゃないか女子とのイベン「お前は次目にしたときクロス」・・・逃げるか」

そんなことを言いながらそれぞれが持ち場へと移動して行き、

俺と平沢だけが残ったわけだが

「知るかよめんどくせえ。俺は帰「お願い！付いてくるだけでいいから」！」帰らせろオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

こんなやり取りが続いた後・・・

（3階廊下）

「りゅうくんありがとね〜♪」

「・・・・・・アア」

さっきのやり取りの途中、平沢が泣きそうになり仕方なくこうなった。

（ほかの学生がいるなかで泣かれたら俺がやったみたいになるじゃねえか畜生・・・・）

「それよりよオ？ いい加減離れろよ邪魔くせえ」

「だってここ怖いし・・・・ダメ？」

「離れろ、と言ったところで無駄か・・・・勝手にしろ」

「ありがと〜！」

この廊下はオカルト部やらそういう不気味な部が固まっているのが怖いのか、俺のことなどお構い無しに左腕に抱きついてくる。

なんだこの状況・・・・。

悠二に見られたら確実に終わるぞこれ？というかこいつはこういうことの意味をわかってるのか？・・・いやわからずにやってるか。

「あら？」

そんな時に知らない女の先生が4階から・・・誰だこいつ？でも先生の中ではめずらしく美形だな。

「あ、山中先生だ〜♪」

「山中？誰だこいつ？」

「あら〜山中じゃなくて山中先生でしょ？今後気をつけるように」

「・・・すみません」

「わかってくれればいいわ〜。それより二人ってもう付き合ってるの？」

「え？・・・ち、違います先生〜！」

「ハァ・・・」

今俺の腕にくっついてる平沢を見ればそうなるわな。

「さすがだな天然。この状況の意味すらわからずにやっていたとは」

「だ、だってここ怖いのはっかだし・・・」

「というか何であなたは何恥じらいとかないのよ？」

「別に。そういうことに興味がねェ」

「ばっさり言うわね・・・で、平沢さん。軽音部ならこの上の音楽室よ」

「あ、ありがとうございます」

「ちょっとまって、何であんたが今から行く場所を知ってる？」

何処に行くのか聞いてもないのに言ってきたので聞いてみた。

「私が平沢さんから入部届けをもらって今渡してきたからよ？平沢さんも今から行くところだったんでしょ？」

「はぁ・・・最悪のタイミングだなオイ」

「？。どういうこと？」

お前がやったことが何かを教えてやるよちくしょう。

もうちょい早ければ行かずにすんだのに・・・

「こいつ軽音部がなにかも知らずに入部したんすよ」

「平沢さん。それ本当？」

「はい、つい勢いで入部を・・・それで今から止めてこようと」

「でももう渡しちゃったし、御免けど頑張っただけ？」

そう言って山中とかいう先生は下へ降りていった。

「・・・さっさと行くぞ」

「・・・いろいろと御免ね？」

「別に気にしてねえから謝ってくるな。調子が狂う」

「うん！」

めんどくさいけど行くしかねえか・・・。

一六二 (前編) (前書き)

一気にやったので間違いがあるかもしれません。

— 6 — (前編)

〔音楽準備室前〕

「ここか・・・」

「さっさと言って来い。俺は帰る」

「え？もういっちゃうの？」

「ついて来るだけだったはずだろオが・・・違うのか？」

「出来ればもうちょっとお願いします！もしかしたら・・・アワワ
ワワワワ」

何を考えたのかわからんが天然が「何か」に怯えているらしい。

・・・なんとなく何を考えてるのか想像できるのだが。

「言っておくが厚化粧の奴らはいないからな・・・多分」

まだ怯えているせいか、聞いていないようだ・・・

そんな時に誰かが平沢の肩を掴んだ。

「イイイアアアアアアア！！！！！あああ、あの、あ違います違いますち、ち、違います違う違う違う（以下省略）」

相当驚いたようで、手を小振り振って違います？アピールしてる。

「・・・・・・・・何やってるの？」

デコ女が呆れながらに聞いていた・・・・つかこいつ誰？

「は！・・・ビックリした〜」

「あ、もしかしてあなたが平沢 唯さん？入部希望の！」

「は、はい！？」

「いろいろ誤解してて御免！ギターがすっごくうまいんだよね！？来てくれるのまってたよー！！」

あらぬ尾ひれがついてるってこういう時に使えるな。

てか少しは平沢に話させろよデコ女・・・

「そーい、やそつちも入部希望者？」

「いや、こいつに強制的に「わかってるって！入部希望なんだろう！」「ちょ！？オイ人の話を」

俺も強制的に連れて行かれ、

デコ女がドアを勢いよく開け放ち

「みんな！入部希望者が来たぞ！しかももう一人！！」

勝手に決め付けながら言いやがった。

「本当か！？」

「まあ〜♪」

後の部員なのだろうか、さらに二人の女子がいた。

「ようこそ軽音部へ！……！！」

「歓迎いたしますわあ〜」

何故俺を見て驚く？

「律うーうー・・・」

「はいはい我慢しましょうね。そんなことよりムギ！お茶の準備だー！」

「ハイ！」

お茶の準備から数分後。

目の前には何か高級感を漂わせるティーカップや洋菓子が・・・

（甘いのは・・・ティーがあるからなんとかなるか。しかし平沢もこれを前に戸惑ってるしよお？どうする？）

「どうぞ？召し上がって」

部員3人が何故か集中して見てくる。

何故そこまで前のめりになるんだこいつらは・・・。

「ズウ・・・おいしい・・・！」

さらにケーキに手を伸ばす。

「おいしい〜!!」

（こいつ何しに来たんだ？）

相当おいしいのか自分の世界にトリップしてるようだ。

俺も一応食ってるが・・・悪くはないな。

「平沢さんはどんな音楽がやりたいの？」

「え？」

「どんなバンドが好きか」

「え?？」

「好きなギタリストは？」

「ええ・・・とお・・・」

このデコが話を聞かないことはわかった。

平沢も平沢で早く言えよめんどくせえ・・・。

「じっ、じっ、じっ」「ジミーヘンドリックス？」

「おおー！」

あ・・・チャンスを潰してきやがったこのぱつつん。

「え！？い、いえじっ、じっ、じっ」「ジミーペイジ？」

「おおー！！！」

「違！？ちっ、違」「ジェフベック！？」

平沢がなんかもう泣きそうな必死そうな表情で否定しようとするが、ぱつつんによりすべてアーティスト名に変換された。

てか「ジ」で始まるアーティストよくそんなにでるなア？

「そっかジェフベックかあー！」

「どなた？」

「ロックギタリストに二種類しかないない、ジェフベックとジェフベック以外だって言われている常に新しいサウンドに挑戦する挑戦的

なギタリスト！」

「まあ〜！」

「さっすが、渋いね〜平沢さん！」

「アハ・・・アハハハ」

こいつ・・・マジで何しに来たんだ？ぱつつんの熱い説明にやられたか？？

・・・そろそろ言わないと取り返しつかないだろ。

「平沢さんみたいな人が入ってくれてよかったな〜」

「一週間以内に、あと一人集まらなかったら廃部になるところだったんです〜」

「ほんつとにありがとー！！」

金髪から死刑宣告でちまったよチクショウ・・・

（おい平沢。そろそろ言わないとお前部活決定だぞ？）

（でもますます断りにくい状況になってるよ・・・）

（ああもうじれってえなあ・・・言えばいいんだろうがア）

「・・・感動的な場面で言うことじゃないんだが、こいつは入部を止めに来たんだぞ？」

「へ？・・・」

「後俺はこいつの付き添いで入部希望じゃねエ」

「マジで・・・？」

ああ・・・3人とも固まっちゃったなア。わかってはいたが。

「ほんとにごめんなさい！私ギターは弾けないし、もっと違う楽器やるんだと思って・・・」

「じゃあ何なら弾けるの？」

来るかカスタネット？

「カスタ・・・！ハ、ハーモニカ！」

「あ、ハーモニカならあるよ吹いてみ」「ごめんなさい弾けません！」

さすが天然。予想を右斜めに行くか・・・

そして何故ハーモニカを持ってるデコ女？

「でもうちの部に入ろうって思ったってことは音楽には興味あるってことよね？」

「ほかに入りたい部とかあるの？」

「ううん・・・特には」

そういったとたんに、何故か3人がアイコンタクトをし始める。

大方平沢だけでも取り入れようって考えか・・・俺には関係ねエけど。

「本当にごめんなさい・・・じゃあ」

「あああちよっと待って!!」

「もういっぱいお茶いかが？」

平沢が帰ろうとしたが、逃さない気まんまんの部員達が制してきた。

そして、

「え……でも」

「クッキーとマドレーヌもあるの！」

「うん！」

えずけた。

一六二 (後編) (前書き)

連続投稿です・・・疲れた。

「おいし〜♪」

結局簡単に引っ掛かった平沢が横でまた食っている。

(アア・・・デジャブ)

「・・・ハ！すいませんこんなにご馳走になるつもりじゃ」

「いいのいいのー」

「毎日こうやって一緒にお菓子を食べましょう？」

「何か趣旨が違ってきてイッ！！！」

あ、パツン足踏まれたか？空気を読めと・・・。

「平沢さん。ほかにはどんなことが好き？」

「あゝおいしいものなら何でも」

「・・・うちでは何してるの？」

「ころころ・・・かな」

平沢が見事なニート発言をしたおかげでデコ女が呆れかえってるぞ
オイ？

「好きなものとかある？」

「あ！可愛いものが好き、かな」

「ニガテなものは・・・？」

「熱いのも寒いのもニガテなんだ。冬はコタツにこもりっきりだ
し、夏は床の上を転がってばかりいるの」

「・・・お前典型的なダメ人間だな？」

「ガン！！」

禁句だったかこれ？

「・・・で、どうするんだ平沢？もう行くのか？」

帰りたいので一応は助け舟を出してみるが

「うん・・・あの、じゃあ・・・」

「あ！行かないでお願い！！ゴロゴロしてるだけでいいからー！！」
やはり制された。

「・・・それは部員として意味があるのか？」

「い、いやそれは・・・！」

「もっとおいしいお菓子持ってきますから！」

「うう・・・」

（なんか嫌な予感・・・）

平沢の目に涙が溜まってきてるあたりで俺はどうするか考えることに。

「ごめんなさい・・・。軽い気持ちで入部するなんて書いたから」

今にも泣きそうなぐらいの涙が溜まっている。

（泣くよこれ絶対泣いちゃうだろめんどくせえ・・・）

「期待させるだけさせて・・・なんて謝ったらいいかああああ」

ついに平沢が泣き出し始めた。

（クッソめんどくなくてきちまった・・・。何かねエか・・・？）

「私たちこそごめんなさい・・・」

「無理に引き止めて悪かったな・・・」

（・・・部活・・・軽音部・・・音・・・音楽！）

よし・・・これで落ち着いつけば・・・

（おい軽音部三名。ちよっどこっちこい）

（何・・・？）

（おそらくこいつも泣き止んで尚且つ入部するかも知れない方法がある）

（本当か！？）

（一応軽音部だ……。演奏ぐらい出来るな？）

（演奏？それで落ち着いてくれるの？）

（やってみなきゃわからねエがやる価値はある）

（オッケー！それならやってみるぜ！）

「ねえ平沢さん。せめて最後に私達の演奏聞いてくれない？」

「・・・・え！？演奏してくれるのー！？」

さっきまで子供のように泣いていた平沢が演奏すると聞いた瞬間泣き止んだ。

予想以上の反応だったことに俺は

（・・・なんか必死に考えた俺がバカみてえだな）

とりあえずこのまま進めるために軽音部員が演奏の準備をし始める。

平沢は目の前の長いすに。俺は壁に寄りかかっている。

これで入れば以後俺は苦勞せずすむはず・・・だよなあ？

「じゃあ！」

ドラムのスティックを叩きながら

「1ゝ2ゝ3ゝ4ゝ！」

流れてきたのは、小学生で1度は聞いたことがある「翼をください」だ。

ボーカルはいないから音だけだし、正直いろいろ抜けてる気がしてぎこちない。

まだそこまで練習していないのだろう。

でも・・・

「はわぁ〜♪」

こいつがいいならそれでいい・・・

入るの俺じゃねェし。

「えへへへ。どうだった？」

「何ていうか、すごく言葉にしづらいんだげど！」

「うん！」

「あんまりうまくないですねー！」

・・・どうしろと？これをどうしろと？

「でも、すっごく楽しそうでした！」

「」「え？」

「私！この部に入部しますー！！」

「」「・・・！！」「」

デコとぽつつんが頬をつねって確かめ合っている。

「バンザイー！！」

どうやらうまくいったようで。

(ハア・・・もう行ってもいいかな？やっとな帰れる・・・)

そう思い、帰ろうとしたが

「ガシッ」

「・・・アア？何だ平沢？」

「りゅうくんも入部しようよ！」

「・・・俺は付いてくるだけだったはず「ガシッ」」

「人数は多いほうがいいからな！」

「・・・・・・・・さっさと帰りたいんだがよお？」

しかし一向に離してくれる気はないようだ。

・・・もうめんどくせえ。言ットケバイイカ・・・。

「なあ？そんな無理やり」

「・・・わかった」

「」「え?」「」

「入ればいいんだろオ? もう反対する気力もねエ・・・好きにしろ」
それから少し間が空き

「やった〜!」

「部員もう一人確保ー!!」

「い、いいのか? こんな無理やりで?」

俺のことがニガテなのかただの心配なのかはわからないが黒髪ぱつ
つんが聞いてくる。

「言っただろ? もう反対する気力もない・・・」

「な、なんかごめんな?」

「・・・アア」

そんな時にデコ女がカバンから何かを取り出した

「へへ〜ちょっと失礼〜」

「あ、あたしのカメラ」

「じゃあ軽音部活動開始記念に、はいいくよ！」

急に撮られた写真には

デコしか移ってないデコ女、

後の三人は普通に、

俺は無表情で移っていた。

「あ、でも私ぜんぜん楽器できないし・・・マネージャーとかどうかな？」

「いや、運動部じゃねえし」

見事にデコとハモっちまった。

「そうだ。この機会にギターを始めてみたらどうかしら？」

「で、でもギターってすごく難しそう・・・」

「大丈夫だよ！ 私たちもわかるところは教えてあげるし」

平沢は少し考えてから

「そうだね！さっきの演奏聞いてたら私にも出来るかもって思えてきた！」

「・・・それはよかった」

ある意味爆弾発言をした。

「こいつの一言一言気にしてたら持たねエぞ？」

「お前も苦勞してるんだな？」

「・・・アア」

「で、お前は・・・その前に名前は「りゅうくんだよ！」りゅうくん？」

「平沢黙れ・・・。古川 龍斗だ。呼び方はりゅうくん以外で普通ならなんでもいい・・・」

「じゃあ龍斗で！私は田井中 律！」

「わ、私は、秋山 滯。よろしく・・・」

「琴吹 紬です。よろしくお願いします」

「アア……。だが田井中はデコのほうが呼びやすいんだがなア……。いいか？」

「よくねー！デコは禁止だー！……で、話がそれたけど龍斗は何の楽器にするんだ？」

「キーボードとドラムはそこまでいらねエよな多分……」

「じゃあベースかギターのどちらかか。」

「人数が多いほうがいいのはどの楽器だ？」

「そうだなー、やっぱりギターは2名ぐらいいると助かるなー。リードギターとサイドギターで分けれてると曲も少し変わってくるし」

「じゃあギターで構わねエ」

「決断早！？」

「りゅうくん私と一緒にだー！頑張ろうね？」

「……。なんか騒がしくなりそうだなアオイ」

こうして終わって後々「なんで入部しちゃったんだよ俺……」と思うのはまた別の話。

「え！？結局入部したんだ！？」

「しかも龍斗も！？」

「何故に！？」

次の日。

入ってしまったことにより只今尋問中・・・

「へへ〜どうしてもって言われて〜♪」

「で、俺はその流れで半強制になってわけだ・・・」

「「マジで！？」「」」

「あ、ああ〜マネージャーとして、とかね？」

「人に言われるとなんか悔しい〜ちゃんとメンバーとして入ったんだから！」

「てか軽音部にマネージャーとかいらねェだろ」

「「確かに」」

「それよりも龍斗が部活だぜ! ? なんか起きるんじゃない? 」

「俺は何なんだよ・・・? 」

「べつに俺はいいことだと思うぞ」

「そうね。二人とも初の部活みたいだしいい影響にはなるんじゃない? 」

「ソリヤアリガトウゴザイマス」

「うん! ギターも一から教えてくれるって言うし! 」

「へえ・・・ってことは新しくギター買ったりするんだ? 」

「・・・そうだ、ギター買わねエとできねエ。今度行くか・・・。

「うゝん・・・貸してくれないのかな? 」

「くれないんじゃない? 」

「はっ・・・! 五千円くらいで買えるよね? 」

「「「「・・・」」」」

・
・
こいつ、大丈夫だろうか？

軽音部に入った後、とりあえず今日は解散することになった。

もう夕方、空はオレンジ一色に雲が少しでまさしく帰る時間としてはちょうどいい・・・か。

何かを忘れてるような気もするが、とりあえず今は帰宅中。

といっても

「初めての部活・・・楽しみ〜！」

「あっそ」

「りゅうくんは楽しみじゃないの？」

「・・・さあな」

俺と平沢しかいないのだが。

「つかお前も家こっちなのか？」

「うん。りゅうくんもこっち？」

「……そのりゅうくんはやめろ」

「えゝ……やだ♪」

そのふざけたネームだけは取り消そうとしたが著作者の断固拒否の姿勢から、多分止めてもらうのは無理だろうと確信する。

最近は抵抗もなくなるほどどうでもよくなってきたがな……。

「……もういい。で、俺もこっちなわけ」

「へゝ。でも中学は違うよね？」

「俺んちは地区の分かれ目みたいな場所だから違ったんだろうよ」

「そうなんだ。でも道は一緒だし今度から一緒に帰れるね？」

「……俺じゃなく真鍋と帰れ。あまり話すのは好きじゃねェ」

そんな親しい奴のように接してくる平沢に、龍斗は少し表情を曇らせ、拒絶した。

まだそこまで知らない奴からそう言われることにどうしても慣れない、

いや、慣れなくなったからだろう。

「でも和ちゃんとは部活があるからたまにしか帰れないだろうし・
・。一人で帰るのはつまらないから」

「・・・そうかよ。だったら勝手にしろ」

「え？じゃあ一緒に帰ってもいいの！？」

「いやそういう意味で言ったんじゃない・・・イヤドウゾ自由ニ」

違うと言いいかけると平沢が落ち込みだしたので、しかたなく自由性に。

そうして進むこと数分後

「ここ私の家なんだよ♪」

言われたほうを見ると二階建てのそれなりにキレイな家があった。
すでに平沢は玄関前まで移動していて

「今日は部活付いて来てくれてありがとう」

「・・・そりゃどうも」

「じゃあまた明日」

俺に手を振りながら家へと入っていった。

(・・・本当に騒がしい奴だなオイ)

そう思いながら龍斗は自分の家に歩いていく。

歩いて10分弱ほどで龍斗は自分の家に着いた。

いたって普通の2階建て一軒家で、特に変な部分もあるわけではないが

「・・・やっぱり、何も変わらないか」

家の中に入り鍵を閉める。

中にあるのは生活するうえでの基本的なものだけで、なにより人の気配が一切感じれないほどに静かだということが何か不気味さを感じ

じさせる。

（・・・買い物を忘れたか）

買い物し忘れたため、冷蔵庫の中を探り今日の夜食の材料を探し始める。

（卵と・・・納豆・・・ぐらしか余ってねえな・・・。米は今日ほめんどいからレトルトでいいか・・・）

そしていつも通りに作っていき、テーブルに乗せてテレビをつけながら食べ始めた。

龍斗『一人』で。

（そういやギター買わねえと・・・。明日銀行に行って・・・念のため50万ぐらいあれば大丈夫だろ。・・・一応健吾さんにも言うておくか）

一応確認をとるために携帯で掛け、電話を繋げてから数秒後に反応がきた。

『もしもし?。』

「龍斗っす・・・すんません電話して」

『いや構わないよ。にしても珍しいね？龍斗君から掛けてくるとは』

普段俺からは掛けないので不思議に思っているようだ。

ちなみに健吾さんは俺の父親である古川 健一の双子の兄にあたる人で、ある日以来からよく助けてもらっている。

「ええ。部活でギターを買う必要があるんで、あの通帳の金を使つて良いか確認を・・・」

『何言ってるんだい。あの通帳は君のなんだからわざわざ僕に聞かなくてもいいんだよ？』

「でもあれは・・・」

『確かに健一のもあるけど、あの「事件」は君のせいじゃないんだからそんなに思い詰めちゃいけないよ？』

「・・・ああ」

『それに部活でいるなら健一も喜んで使わしてくれるさ』

「父さんがそう思ってくれるだろうか・・・」

『あいつの兄の僕が言うんだから信用してくれ』

「ああ・・・じゃあそろそろ」

『そうだね。部活頑張れ!』

「わかりました・・・じゃあ」

電話を切ってから、自分の部屋に行って通帳を確認する。

（今の合計金額1409万円・・・50万使うとして1359万円。
食費とか考えても大学2年ぐらいまでは大丈夫か・・・？）

父が残した保険金の計算をしながら、後の使える残金を考えていく。

それが終わってからはいつも通りに風呂に入りまたテレビを見て

（・・・そろそろ寝る時間か・・・筋トレしてから寝るか）

空いた部屋で作ったトレーニング室に似たような場所で、体を少し動かしてから自分の部屋で寝た。

— 8 — (前書き)

やっぱりストーリーが全然進まない・・・ (T A T)

遅くてすみません m () m

軽音部に入ってから次の日、

今まさに存在理由と理由と理由が一切不明な学業という名の無駄事が終わり、それぞれが帰ったり部活に行ったりするころ・・・

「龍斗。きょう一緒に帰れるか？」

今日は特に用事がないらしい渉が俺と帰宅しようと言ってきたが

「・・・まあめんどくせエしサボるk「だめだよりゆうくん!部活いくよ!」」

「今日はめんどくせエんだだから帰らせろ」

「部活があるなら行ってきなよ?・・・ちよつと寂しくなるな」

結局帰れず、中学までほとんど一緒に帰っていたからか渉から寂しいコール。

「・・・わかったよ・・・行きゃいいんだろオ?」

「初めての部活なんだし頑張れよな！」

そこに悠二が応援をしてくる・・・ウゼエ・・・。

「お前はさっさと部活でもゴミ処理場でも好きなところにホール・i
nしてろ」

「ではゴミ処理場・・・って^{なぜ}why!？」

「You are ^{ゴミ}garbage」

「・・・あなたは・・・what?」

それすらわからないようだ。さすが平沢と意気投合できる数少ない
人げ・・・ゴミ。

「私も一緒に帰れないから何だが寂しいけど、がんばってらっしや
い唯」

「うん！行ってくるよ和ちゃん！」

「ほら龍斗も、行っ来て来い」

「・・・アア」

渉がサムズアップをしながら言ってきたので、めんどくさいながら

行くことに。

「りゅうくん早く！ ムギちゃんのおいしいお菓子が待ってるよ♪」

・・・平沢の天然が今日も活躍しないことを願いながら。

「こんにちは」

「・・・」

あの後、普通に何事もなく軽音部についた。

「「こんにちは」」

「・・・／／」

とりあえず二人は普通として何故秋山は俺を見て俯く???

・・・めんどくせエな。

「おい秋山」

「な・・・何!？」

「何故俺を見て俯く?俺に何かあるのかよ?」

「・・・律う」

「龍斗。漣は男子とかニガテなんだよ」

「・・・そうかよ。めんどくせえ奴だな・・・」

そう言いながら秋山を見たら

「ヒッ・・・!」

田井中のほうに隠れた。

「睨むなって!」

「いや・・・ただ見たただけなんだけどよお・・・?」

「・・・よく見て見ると目つきとか鋭いなー?これが普通?」

「・・・悪かったな殺人顔で」

田井中に言われた言葉で昔涉とかに言われたことを思い出した。
わかってはいたさ言われることぐらい。

「いや・・・なんかすまん！」

「そう思うなら最初から言うなデコ」

「それこそ言うなー！」

その後軽音部員の「何故その楽器を選んだのコーナー」を終わらせた後、

時間は少々過ぎて行き・・・

「おかわりはいかが？」

「ありがと」

すっかり部活ではなくお茶会になっている中、

「そういえば、ムギちゃんは合唱部に入りたかったんでしょ？」

「ええ。でもめったに出会えない、とっても楽しくて愉快な人達の仲間になりたかったの♪」

（（珍獣ってことですかー・・・））

・ 何故かは知らねえけどなんとなく田井中と秋山の考えてることが・

「そういえば平沢さん。もうギターは買ったの？」

「唯で良いよ」

「へ？」

真面目に言ったのか、話をそらすために言ったのか・・・？

まあどうでもいいが・・・。

「私濤ちゃんのことすでに濤ちゃんって呼んでるし♪」

「う・・・う・・・・・・ゆ、唯？／／／」

いくらはずかしがりやだとしても、そこまで恥じて言うのかこいつは・・・。

「カッハアアア〜・・・か、かわいい／＼」

なんか問題発言でたんじゃね？なあ？

「で、唯ギターは？」

とりあえず空気を変えるためか秋山が話を戻す。

「ギター？・・・ああ！そっか忘れてた〜！私ギターやるんだっけ
！」

「軽音部は喫茶店じゃないぞ？」

「・・・自覚はあったんだな？」

「い、いやまあ・・・」

結構真面目なんだなこいつ。

「ねえ？ギターってどれくらいするの？値段」

「俺も参考には聞いときてエ」

「う〜ん・・・安いのは1万円代からあるけど、あんまり安すぎる

のもよくないからな〜・・5万円くらいがいいと思うよ」

「え!？5万・・!私のお小遣い十ヶ月分・・」

「高いのは10万とかもあるよ〜」

「結構するなギターって・・」

なんとなく平沢を見るとすごく笑顔で、

「部費で落ちませんか♪?」

「落ちません♪」

しかし田井中も同等の笑顔でバツサリと平沢の希望を切り落とした。

「うう〜・・・」

「これ、おいしいわよ?」

そこに琴吹が菓子差し出す・・一番効果があるアイテムだねこれ。

「〜♪」

「単純だなお前・・・」

「言ってやるな龍斗。これが唯なんだろう」

「とにかく楽器がないと何も始まらないしな・・・」

「よし！今度の休みにギター見に行こうぜ！」

「「「オー！」」」

「じゃあ勝手に行って来「りゅうくんも行く！」拒否権なしかよ・・・」

こうしてギターを見に行くことになってしまったが・・・サボるか？

一 九 一 (前書き)

最近リアルが忙しく遅れ気味です・・・すみません。

今日はギターを見に行くことになってる日。

ベットの上で寝ぼけながらもその事を思い出し、

「…………寝るか『♪~~~~♪』誰だよザってえなァ…」

再び寝ようとしたが枕元においてある携帯がなりだし二度寝は遮られたので、仕方なくでることに。

しかもその相手が

「…………なんだ平沢？」

天然だということだ。

ちなみに前軽音部員とは一応アドレス交換はしたため平沢などからメールや電話がくるようになった。

『りゅうくん。もう集合場所についてる？』

「めんどくせえからパス『それはダメ!』・・・わあかったよ行きや
あいんだろうがよお」

眠いせいで滑舌がうまく回らないが、了承だけはしたため行くことに。

『絶対来てね!じゃあ〜♪』

ブツツ

「・・・・・・しかたねえ。金は一応引き出しといたし行くか」

それから龍斗はベットから立ち上がり大体黒の服装に着替え髪など
適当に整えてから、

特に急ぐこともなくマイペースに目的地へと歩き始め

「なんで他人なんざと行動しなきゃならねェんだよ・・・めんどく
せエ」

愚痴をいいながら進んでいく・・・途中で平沢が走っているのをみた
が気にせずに。

建物が所狭しと立ち並ぶ住宅街に着いた龍斗は、あたりを見回して軽音部員らしき奴等を探し始めた。

（たしかここらへんだったよなあ……あれか？）

探し始めてからちょっとすると、とある歩道橋あたりに3人の姿が見えたので一応進み始める。

するとあちらも気づいたのかこちらに手を振ってきた。

「遅いぞ龍斗ー！早くこっちこーい！」

「うっせェよ……」

とりあえずわたり、そこから気づいたことが

「おい？肝心の平沢はどうした？」

「それがまだ来てないんだよ」

「あ、唯ちゃん来たわよ」

琴吹がそう言うのと歩道の反対側に平沢がいて、こちらに向かいながら

「あ、みんなー！いてっ！」

まずは通行人にぶつかり

「ほ、ほうほ♪えへへへ」

散歩中の犬を見てなで始めた。

「よしよしよしよしよしよしよし♪」

そしてさらに犬をなで始める。

・・・後1メートルにも満たないのにいつ辿り着けるんだこいつ？

「さっさとしろ平沢。ギター買いに行くぞ」

「あ、まってよ」

痺れを切らした俺はさっさと天然を呼び、やっと出発することができた。

「お金は大丈夫だった？」

「大丈夫だよムギちゃん！お母さんに無理言って5万円前借させてもらったから！これからは計画的に使わなきゃ……いっけないんだけど」

と言ったそばから洋服店へと足を運び始める平沢。

正直もうめんどくなってきた……

「今なら買える……！」

「コラコラ」

「ちょっと見るだけ」

「あ……ちょっとみんな」

そうしてぞろぞろと女性人が入っていくので

「どっかで時間でも潰すか・・・」

ため息をつきながら近くにあった本屋に入り時間を潰すことにして、そこらへんにあった本を見ながら龍斗は何故さっさと買いにいけないのかでイライラしていた。

（こんなことならやっぱり一人で行くべきだったなア・・・女子ほどめんどくせえ者もそうそう無いんじゃないか？）

本を適当に見て1時間ほど経過したころポケットにあるケータイが鳴りだしたのででることに。

「・・・なんだデコ女？」

『デコ言うなって言ってるだろー！それより今何処にいる？』

「そこらへんの本屋で「仕方なく」時間を潰してるが何か問題でもあるのかよ？」

『ごめんごめん。とりあえず〇〇っていう店で休んでるから来てくれない？』

「・・・・・・・・わかった」

『じゃあな』『律・・・ここは本来私達が行くべきじゃ』『ブツッ

唯一まともな事が聞こえたが、ここにおいても話が進まないのので田井中に指定された店に

(あいつら・・・ふざけてんのか？)

多少？イラつきながらも行くことに。

— 10 — (前書き)

暇なときにごできるだけ頑張りたいです。

とある店の中で平沢達は休憩しながら龍斗を待っていた。

「あゝ疲れた〜♪」

「買っちった〜♪」

「楽しかったですね〜♪」

唯、律、ムギと順番にそれぞれ楽しんだ様子でくつろいでいる。

「なあ？本当にここで古川君を待ってていいのか？遊んでたのは私達なのに」

「だ〜いじょうぶだって！龍斗もわかったって言ってたし」

「いいのかな・・・？」

「そう思えるなら秋山だけはまともだということだなア？」

「」「」「いつのまに!?!」「」「」

「そんなことは今はどうでもいいんだよ。それよりもなア田井中、」

「・・・何デショウカ？」

『目的忘れて遊んで楽しんだ挙句に、待たされた側を呼び出すってのは・・・どういことだアア？』

「「ビクッ！」」

「・・・あ、いやその・・・」さっさと答えろ」動くのがめんどくさくて呼びました！」

今にも誰か殺せるんじゃないかといった龍斗の表情に3人は少し驚き律はなんとかごまかそうとしたがせかされ本音を出した。

「ハア・・・もういい、それよりギターは買わねえのかよ？」

「あ、忘れてた！」

「お前なあ・・・」

「じゃあ早く行こうぜー！」

平沢が目的を忘れていたのはスルーするとして、俺もさっさと行って帰りたいので田井中の言葉に従うことにした。

田井中に付いて行くと「10GIA」とかいう店があり、今はその店内にいる。

エスカレーターで下に下りると様々な楽器やそれに使う部品や誰かは知らないがアーティストのCDなどが売っていて、まさしく楽器専門店と言えるようなところだ。

「すごい！ギターがいっぱい！」

「そりゃ楽器店だしなー」

「んゝ．．．．ん？」

周りを見ていた平沢の視線に止まったのはダブルネック・ギターと言われる代物だがもちろん素人の龍斗も知るはずも無く

（なんだこのギターとギターが合体した奴．．．？どうやって弾くんだよ？？）

てかこいつは何考えてるんだ？

まあ平沢は普通の発想の斜め上に行く天然だから考えるだけ無駄か・
・。

「唯どれがいいか決めた？」

「あ、うーん・・・何か選ぶ基準とかあるのかな？」

「もちろんあるよ。ギターってネイルはもちろん重さやネックの形や太さもいろいろあるんだ。だから女の子はネックが細いほうが「あ、このギターかわいい♪」」

さすが天然。自分から振った話をそのままスルーするとは・・・。

てか俺も自分の見てくか。

（にしてもギターってのはこんなにあるのかよ・・・デザインで決めるか？）

そんなことを考えているうちにあるギターが目に入った。

少し気になったので近くで見てみる。

（「Fender Stratocaster」（フェンダー・ス

トラトキヤスター）？・・・名前は知らねえけどデザインは悪くはねえな。こっちの白色の奴にするか？」

「なあ秋山？別にこれでも問題はないか？」

「あ、ストラトキヤスターを選んだんだな」

「・・・これ有名なのか？」

「ジミ・ヘンドリックスや他の有名なギタリストも使用していたタイプと同じ物なんだぞ」

「？・・・まあよくわかんねえけど、これでも良いんだな？」

「値段も悪くないし、古川君がいいと思ったならそれでいいと思うよ。私は今持つてるベースを最初に見たときに、ほしくてずうと悩んで買ったんだ。だから気に入ったのが一番いいと思うよ。」

楽器ってそういう選び方もあるのか？

「・・・そうか。てかその古川君ってのなんか子供扱いみたいで嫌なんだけどよお？どうにかならねえ？」

「そ、そうか・・・？じゃあ・・・りゅ・・・龍斗／＼／？」

平沢の時と同様に何故か恥らって言うてくるあたりがなんか・・・

不自然で・・・なんかなア。

「・・・恥らうぐらいなら別に「いやいやむしろそう呼ぶべきだぞ
滯？龍斗も軽音部の一員なんだし」

「そ、そうか。じゃあ今度からそうする・・・／＼」

別にいいと言おうとしたところに田井中が入ってきて逆に進め始めた。

そこから秋山には聞かれない程度に話す。

（田井中・・・お前秋山で遊んでんだろ？）

（面白かったからつい。でも3年間は会うわけだし今のうちに慣れさせるのもいいかと思ってな？）

（・・・そうかよ。さすがは幼馴染だなあ）

（つか龍斗だけみんなのこと苗字で呼んでるだろ！龍斗も名前で呼べ！）

（アア？そのうちってことにしとけ・・・）

（逃げるなー！）

「このギターがほしいの？」

「うん・・・」

田井中と話してる時に聞こえてきた声のほうを見ると、さっきのギターから一向に動かない平沢と相談？にのってる琴吹の姿があった。

「あいつどうした？」

「どうしてもあのギターがいらしいんだけど25万円もするからな・・・それで悩んでるんだよ」

俺は決まったのでひとまず平沢達のほうに行くことに。

「あっちに安いのあるぜ？」

「うーん・・・んー・・・やっぱこれがいいなー・・・」

相当そのギター、「Gibson Les Paul」（ギブソン・レスポール）とかいうのがほしいのか平沢は買えないのにその場から動こうとしない。

「私も今のベースがほしくて唯と同じ感じだったなー」

「私も中古のドラムセット値切って値切って」

「店員さん泣いてたぞ」

「どうしてもあのドラムがほしかったんだよねー」

二人が思い出話に花を咲かせていると

「あのー「値切る」って？」

平沢を越えるかもしれない質問が出てきた。

（まだ小学生ならわからなくもねえが、高校生で知らねえってこいつ・・・）

「欲しい物を手に入れるために！努力と根性でまけさせることだよ！」

「すごいですね！！なんか憧れます！！」

「・・・憧れる要素が何処にあるんだよ」

意味を聞いて田井中のテンションに釣られたのか、琴吹も急にハイで答えて「値切る」というイメージ的にはババアがやってそうな方法を憧れるでまとめた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ふと平沢のほうを見ると、未だにレスポールを見続けていた。

そんな時に田井中が

「よし！みんなでバイトしよ！唯の楽器を買うために！」

「えー！？そんな悪いよー・・・」

「これも軽音部の活動の一環だって！」

「りっちゃん・・・」

「私やって見たいです！」

「ムギちゃん・・・」

「よっしゃー！やるぞー、オー！」

「オー！」

平沢のギターを買うためにバイトをすることになったようだが・・・

「・・・なんで俺が他人のために（ボソツ）」

「何かいったか？」

「いや・・なんでもねえ」

その後、ギターをを買うのを忘れたまま帰ってしまい後々後悔したのはまた別の話。

— 111 — (前書き)

今日はオリジナルで行きます。変な感じになるかもしれませんがよろしくです。

後感想など書いていただけるとうれしいです。

あの後俺達は特に用事もなくなったので解散となり、自転車できつさと帰ろうとしたが平沢に捕まり結局歩いて帰るはめになったわけ……

「本当に手伝ってもらっちゃっていいのかな……？」

「まあ自分から手伝うって言ったし、お前がギターを買わなきゃ部活としても起動しねえからいいんじゃないか？」

こいつなりに引け目になってるみたいだが相手が勝手に手伝うとかほざいたんだから別に問題はねえだろうよ。
それよりもさっさと帰ってえ……ついでに買出ししとくか。

「平沢。お前さきに帰っとけ……」

「ほえ？ 何で？」

「食材の買出しがあるから俺は店行って来るつつうわけだから先に帰っとけ」

「えゝ私も行くゝ！」

「別に楽しくもねえぞ？ だから……ああもういい勝手にしろ」

「じゃあお言葉に甘えて〜♪」

正直一人で行きてえんだけどよお？

なんか流れにのった方が楽だからいいかこれで？・・・でもやっぱりめんどくせえ。

（店内）

「とりあえず長持ちするカレーでいいか・・・」

「りゅうくんって料理できるの！？」

「つか買出しに行く時点で気づけよニート予備軍。どうせ料理もできねえんだろ？」

「（グサツ！）・・・その言葉は重たいよ」（泣）」

（やっぱりできねえのかよこいつ・・・てか逆に何が出来るんだ？）

そんなことを思いながらもカレーに必要な材料をカゴに入れていく。途中平沢が菓子を混ぜようとしたがそれは止めた。

「まあこんなもんだろ・・・」

「私も手伝おうか？重たそうだし」

「少なくともお前より俺が持ったほうが速いからパス」

「もってみなきゃわからないっす！」

「・・・じゃあ持ってみろよ？」

「ウツ・・・お・・・重た・・・い・・・」

今日の食材は2日分の量だったため、女の平沢にはちと重たかったようだ。

こうなるのはなんとなくわかってはいたが・・・。

「ハア・・・さっさと行くぞ」

「了解っす」

平沢が持てない為結局俺がまた持って会計を済ませるべくレジへと向かう。

「ねえりゅうくん！あそこ見に行こうよ！」

「アア？・・・ここ女子が行くところだろオが。何で俺が行かなきゃならねえ？」

「でもかわいいよ？」

「・・・話が噛み合わねえ」

店を出てから少し歩くと女子がよく行きそうな・・・レディースショップっていうのか？
とりあえずそんな感じのところに連れて行かれそうなのだが

「ちょっと買い忘れたものがあったわあ。平沢、お前先にその店に入ってる」

「うん。わかった」

・・・さて

「何か用かなア？テメェらのことなんざ記憶にねえんだけど？」

そういいながらおそらく店をでてから付いてきたであろう不良らしき人物数名へと顔を振り返る。

「違う違う。お前が連れてたあの子いいな〜ってな？」

「そうそう。俺らとちよつと遊ばないかって誘おうとしてたわけ」

「だから貸してくれねえ？ただ『遊ぶ』だけだからさ〜」

久振りにゴミに遭遇するなア・・・アア反吐がでる。

だれが興味本位で平沢みてえなまともな奴に手エだす権利があるんだよ、なア？

「・・・そんなにやりてえなら風俗店にでも遊びに行けばいいかですかねエ？」

「はあ？何お前喧嘩売ってんの？」

「こいつ絞めてあの子もらってこうぜ？」

「いいねえ〜合理的じゃねか」

「じゃあちよつとあっち行こうか〜？」

「・・・・・・・・いいねエ」

言われるままに付いてくと、ビルとビルの隙間でほとんど人の気配が無い所に付いた。

これなら警察も気づきにくいだろう・・・とりあえず食材の入った袋はここらへんにおいとけばいい。

「じゃあさっさと殺ろうぜー」

「メリケンサックがポケットに入ってたんだけど使うか？」

「おおサンキュー」

3人の内二人がメリケンサックを構えてリーダー的な奴は素手でくるようだ。

「じゃあ景品ゲットしますか」

そういいながらメリケンサックを構えた一人が俺に向かって拳を

ボコッ！

俺の左頬に当てた。だが顔からちよつと血が出るだけで体全体では倒れてはいない。

「あれゝ見た目からはまあまあ骨のある奴だと思ったのによゝ」

「ザコ〜！これすぐ終わるっしょ」

「……………正当防衛」

「あ……………」

「……………アハッ」

その瞬間に俺は、相手の鳩尾に蹴りを軽く本気で入れた。
打ち所がよかったのか見事に吐いてくれたようだなによりだ。

「グハッ！？んゲホッゲホッんウええエえ（ボチャボチャ）」

「てめえ何しやg」

次に来た奴は足を払って頭から叩き落す。

「いってええなあ！」

「叫ぶなゴミ」

ドゴッ！

なんとか耐え起き上がってきたので、もう一度倒し一切の躊躇もだ

さずに倒れた不良Bの顎を蹴る。

あまりの痛いのか口元を手で押さえて悶えているがそんなの知ったこっちゃねえ・・・そこにさらなる追撃としてわき腹を蹴って蹴って蹴って踏み潰して蹴って間接踏み潰して蹴って蹴って蹴って、と繰り返す。

すでに口元からまあまあ出血してるが・・・どうでもいいなア。

「おい！それ以上そいつに攻撃することねえだろ！止めろよ！」

「・・・社会ノ屑ニ生キル価値ナンテアルノカナア？」

「そ、それだけでそこまでやるのかよ！？もう喋れないぐらいまで弱ってるじゃねえか！！！」

「じゃあお前もこうなるか？早く来ないとこいつ・・・死ぬかもなア？」

「い、いや悪かった！もう今回のことは諦めるから助け「ボキバキ」がああ！？」

最後のリーダーみたいな奴の手の骨を少し砕いて黙らせた。

ふと半殺しにした奴の手元にあったメリケンサックが目に入ったので

「じゃあこれで殴られて声をださずに耐え切ったら見逃してやるよ、いい駆け引きだろオ？」

「な!?! そんな何回かわからない駆け引きできるわけ」「お前に決定権はねエって」がはっ!?!」

そこからそいつが動けなる直前まで殴り続けた。

何回かはわからないが何度も何度も・・・手が真っ赤で汚エ。

「お・・・お前。まさか・・・「黒の残虐者」か?」

「・・・ずいぶんと懐かしいあだ名だなアオイ。てか厨二病みたいだからやめろ・・・まあそんなことはどうでもいい、先に殴ったのはお前らで俺はその正当防衛ってことだ。わかってくれたかなア?」

「わ、わかった・・・もうあの子にも手はださねえから、これ以上は・・・」

「だ・か・ら・さア? お前らゴミに選択肢なんてもないわけわけわかれよ」

「ぐはっ!?!?・・・た、頼むこれ以上は・・・」

とりあえずもう一回蹴り倒すと、意識はあるが喋れなくなっただうなので終わったと判断し表へと歩き始める。

一応喋れなくなるまで殴ったが数時間すれば少しは動けるだろう・・・。

置いておいた袋を持つ前に頬の血をハンカチがなかったのでレシー

トでふき取り手に付いた血液もある程度払い落としてから袋を持って平沢がいる店へと移動する。

店に近づくと入り口に平沢が立っていたので声をかけることにした。

「何してんだ平沢？」

「遅いよりゆうくん！ずっと待ってたんだよ！」

「ちよつと目的の物が見つからなくて少し遅くなった。放置して悪かったな」

「んゝそれなら仕方ないのかな、ってどうしたのその顔の傷！？」

「いや少しこけただけだ。だから気にすんじゃないねエ」

「・・・りゆうくんって結構ドジ？」

「お前に言われたかねえよ・・・」

「・・・なんとか誤魔化せたか。こいつは知らなくてもいいことだからな。」

「とりあえずさっさと帰るぞ。買出しも終わったしなあ」

「ほゝい♪。あ、バイト何になるのかな？」

「少なくとも秋山が出来る・・・接客とか以外のものじゃねえか？」

「じゃあ滞ちゃんでも出来るバイトを探さないと!」

「まあそういうこったな」

そうして雑談をしながら俺は家へと帰り買出ししといた食材を冷蔵庫に詰め込みいつも通りトレーニングをしようとしたが

「・・・今日はトレーニング止めとくか。」

風呂だけ入ってそのまま寝た。

— 12 — (前書き)

アルバイト編です。不自然にならないように出来るだけがんばります。(。∀。) b

『龍斗。お前が誰かを助けたり守れるようになったら、困ってる人を助けてあげなさい』

『何で?』

『そうだなー・・・俺はただ困ってる人を見ると放っておけない性格だからだけだな?すべての助けた人というわけじゃないが、きつと何かを自分に返してくれるはずだ。それはお前の助けにも氣力にもなると思うから、だな。』

『・・・簡単に言えば困ってたら助け合えってこと?』

『やっぱりお前は頭がいいなー!さすが俺の子だ!』

『そうねー。この子ならきつと将来はあなたみたいに人の役に立つ仕事をしてくれるかもね?』

『親子一緒に働いたら俺は幸せ者だなー。龍斗も警察官になってみるか?』

『・・・今はよくわかんないけど、父さんと一緒に働きたい』

『それは楽しみだなー!俺は待ってるぞ!』

『ふふっ。こういうのが幸せって言うのね』

『この恥さらし共。お前ら生き恥さらしてないでさっさと死ねって』

「!?!? . . . 夢 . . . か」

現時刻 6 時 3 0 分頃。

夢から目を覚ました龍斗は少しシャツが汗で濡れていて息も荒かった。

「 . . . 父さん . . . 母さん クソッ! 」

そういいながら「ドンッ! 」とベットに拳を殴りつける . . . だがこんなことで気が晴れることはなかった。

「今日は学校あったな . . . 行くか 」

そして学校へと行くために準備をして玄関を開ける。

「父さん、母さん・・・言ってくる」

居るはずもない人へと話しかけるが、もちろん反応はない。それはわかっていたからか龍斗もまたずに家を出て行く。

「バイト？」

「うん！ギター買うために♪」

「唯ちゃんにバイトが出来るのかな？」

「ひどいよゆうくん！私だってやれば出来るもん！」

「その自信を本番に活用できなさそうだけどな・・・」

「やってみなくちゃわからないぞ龍斗。意外に化けるかもしれないし」

「・・・一理あるって認めてやる」

今はどうでもいい授業が終了し、忌まわしい学校から開放された生徒が皆好きなように動いている。

まあ俺らはまだ教室で無駄話をしてる派だが。

「それに軽音部の皆も協力してくれるんだ♪」

「ええ！？皆を巻き込んで！？」

「うん！」

「すがすがしい笑顔でさらっと連行発言かよ・・・」

「皆ってことは龍斗もやるのかバイト？」

「・・・やりたかねえがな」

「そこも女子とのイベントだと考えて「お前の髪の毛をライターで炙る」地味にひどいの止めて!!」

「その発言は女子からしたら下心丸出しの発言としか」

「しょうがないだろ和ちゃん！それが男子なんだから!!」

「いつも通りだな」

「ウザってえくらいにな・・・」

「女子とのイベントって？」

「・・・知らなくてもいいぐらいにどうでもいいことだ」

悠二^{バカ}は今日も通常営業でそれに呆れながらも、さっさと部活に行くために平沢を呼んで部室へと向かう。

・・・今日も喫茶店だろうか？

く音楽準備室く

今日の軽音部は半喫茶店で稼動してたがとりあえずそこはスルー「龍斗君はコーヒーにする？」・・・できなかったわけで、今は座ってコーヒーをたまに飲みながらバイトを探すためにバイト募集の広告などを調べている。

「何のバイトが良いかな？」

「ティッシュを配るのは？」

ティッシュ配りのバイトの話聞いた秋山が何かを考えているよう
で。

「む・・・無理・・・」

「ファーストフードはどうですか？」

また秋山が考え始め・・・

「駄目・・・かも」

「あ、そっか。漣にはハードル高いかもな」

「・・・怖い人が出てきたらと思うと玄関の窓が押せない、オーダ―が聞きにいけない！・・・はう！」

「み、漣さん！？」

恥ずかしさが沸点まで到達したようだ。

そんなに嫌なら何故やろうとするんだこいつ・・・？

「ご、ごめんね・・・無理しなくて良いから」

そういいながらも平沢の表情はどんどん曇っていく。

（やる前から無理だとか駄目だとかばかり言ってる。唯のギターを買うためのに！・・・それは、軽音部のためでもあるのに。乗り越えないと、自分を！）

何を思ったのかは知らないが決心したように立ち上がり

「私！何でもやるよ！！」

どんなことでもやります宣言を شدした。

親友が成長したのが嬉しいのか田井中は嬉しそうな表情をしてやがる。

「♪・・・あ」

「な、何!？」

「これなんてどお？」

そう言って見せてきた広告には交通量・渋滞調査と書かれていた。
確かにこれなら秋山でも出来るか・・・。

「歩いてる人や車の数を数えるんだよ。カウンターを持って」

「あゝ!野鳥の会ゝ!？」

「・・・バードウォッチングじゃねえのか？」

「そうそれゝ!」

「これなら濡もできるっしょ？」

「ホントですねゝ!」

「・・・うん!」

ゝ次の日ゝ

今日からゴールデンウィークに突入しほとんどの人は旅行やら海外

旅行やらで活発になる三連休。

そんな時に俺は平沢のギターのためにバイト・・・ハア。

「ほい」

といいながら田井中がカウンターを皆に渡す。

「じゃあ二人ずつ交代って行きたいところだが人数が奇数なので」

・・・オイ。何で俺のほうを向くんだよデコ。

「龍斗は男だし変わらないってことで「ふざけんじゃねえぞデコ女。お前樂してえだけだろ！」デコ言うなー！それにしょうがないじゃん誰か余っちゃうし」

「・・・この借りはいつか返すハゲ」

「ハゲてねー！」

そんな言い争いをしている時にカチカチと音が聞こえてきたのでそちらを見ると平沢がカウンターを押して遊んでいた。

・・・それちゃんとリセットしねえと後々めんどくさくなる気が。

「ホッホッホッホッホッホッホッホッホッ」

カチカチカチカチカチカチカチカチカチ

「軽快ですね」

「えいやー！！」

「変な叫び声だすな・・・」

「ほうこしゃくな〜!」

それにのせられた田井中もカウンターを押し始めるも

「りっちゃん速〜い!」

「エヘヘヘーあ痛っ!!」

アホ面しながら親指を攣ったようで、俺としては大変いい気味だった。

「ざまアねえなツルピカデコさんよオ？」

「う、うるせえー・・・ああ攣ったー!」

「ムキになるからだ」

「調査開始時間まであとちょっとありますね。とりあえずお茶にしましょ」

「わーいピクニック!」

「何だか心配だ・・・」

「・・・ハア」

こいつらバイトする気あるのか？

まあねえならねえで帰れるけどよお。

— 13 — (前書き)

アルバイト編終了です。

さて、結局俺はぶっ通しでバイトをするわけになってしまったので、昼まですつと座らなきゃいけないと・・・めんどくせえな。

んで今は琴吹と調査してる。

「龍斗君はどういうお菓子が好き？」カチッ

「・・・あんまし甘くなければ特に」

「んゝ・・・じゃあフルーツとかは？」

「自然の甘味は好きなほうだな」カチッ

「じゃあ今度フルーツ系のお菓子をもってくるわね♪」カチッ

「・・・お好きなように」

次は田井中と・・・一緒にやりたくねえ・・・。

「カチッカチッカチカチカチカチカチカチカチカチ」

「遊ぶなデコ」カチッ

だから一緒にやりたくねえんだこいつと・・・。

「カチカチカチカチ！（デコ言うなー！）」

「・・・お前今カウンターで喋ったか？」

理解できる俺も俺だが・・・

「カチカチカチカチカチカチカチ（慣れれば出来る）」

「お前だけだそんなこと出来るの・・・つかバイトする気ねえだろ
デメェ？」

「いやちゃんとやってるぜ！」カチカチカチ

「それは遊んでる奴が言うことじゃねえよ・・・」カチッ

次は平沢・・・なんかめんどくさそうだな？

「早くムギちゃんのお菓子が食べたいな」

「オイ、これはお前のギターを買うためのバイトだろオが」カチッ

「そうなんだけど昼まで待ちきれなくて」カチッ

「・・・まあお前らしいと言えばお前らしいがな」

「それに今日は憂のお弁当もあるし♪」カチッ

「……憂？」

「私の妹だよ」

「お前妹いたのかよ？」カチッ

「自慢の妹です！」

「平沢の妹……あれだな。めんどくさそうだなオイ……」

「？」

最後は秋山か……これが終われば休めるわけだが

「……」カチッ

「……」

オイ、どうすればこの空気から抜け出せるんだよ。
つか本当にこいつめんどくせえな……。

「……オイ秋山」

「な、何……？」

「お前そんなに俺のことが嫌なら田井中と変わってくるが、どうする？」カチッ

「あ・・・嫌いとかじゃなくてそ、その・・・」

「俺が男だからか？」

「うん。やっぱり男の子はニガテで・・・」

「はあ・・・3年間部活で一緒かもしれないねえし慣れてはほしいんだがなア」カチッ

じゃねえと後々めんどくせえだろうしな・・・。

「そうだな・・・私、頑張ってみるよ！」

「・・・つか話せてる時点で慣れてるような気はするんだが？」

「ホントだ。話せてる・・・」

「そりゃよかったな」カチッ

「・・・うん！」

「で、慣れてきてることはいいけどよお。お前カウンター押せよ」カチッ

「あ、ごめん」

そこまで緊張してたのかよ・・・。

「昼休み」

ちょっとした草原みたいな広場があったのでそこにシートを敷いて昼食をとっているところだ。

平沢はさっそく弁当と琴吹の菓子を頬張り、琴吹はお茶の準備をし、俺は端らへんで寝転がり、後の二人はある程度食べたからか仰向けで休んでいる。

さっきまで平沢が持ってきた弁当を皆が食べてたり、俺は食べていないのに平沢が無駄に感想を聞いてきてめんどくさかったが・・・やっと思えるか。

「ムギちゃん。すっごくおいしいんだけどこんな高そうなお菓子いつも貰っちゃっていいのかな？」

「いいのよーいつもいろんな方から頂くんだけど、家に置いていても余らしてしまうから」

「いろんな人から余るほどお菓子を貰う家ってどんな家!？」

「やっぱ琴吹ってあの琴吹のことか？」

「ねえりゅうくん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ねえって」

そういいながら疲れた体を揺すってくる平沢

「……だるいんだ。休ませろ」

「えゝ寝ないでお話しようよ?」

「誰のせいでこうなってると思ってやがる……」

結局無駄話をしてからまた働き1日目のバイトは夕焼け頃に終了して、今はバス停で立ち止まっている。

「一日目終了」

「じゃあ私は駅へ行くから」

「あたしと滯はバス」

「唯と龍斗は歩いて帰るんだっけ?」

「うん!」

「……」

「大丈夫か龍斗?」

「そう見えるか秋山？どっかのクソツたれのおかげでだるいんだよ・
・」

「まあお疲れさん！」

このデコが、ぜってえ返す・・

「明日も「うん！お菓子よろしく！」頑張りましょうって言おう
としたんだけど・・」

「コラコラ」

天然は本性が出やすいと・・

「でも〽余ってるんだったら〜」

「コラーコラーコラ、コラ〜コラ〜コラ・・コラ、コラ、コラ・
・・」

欲しそうな顔をしながら物乞い発言をする平沢に田井中が注意をし
始めると、何故かコラと共に平沢の指がカウンターを押す動作をし
始める。

「やっぱり職業病だ・・」

「・・・こういうのが職業病って言うのか」

それから少し時間が過ぎそろそろお開きということで、俺と平沢は家へと歩き始める。

「じゃあねー！」

「おう！」

「バイバイ！」

「また明日ー！」

「てか龍斗も別れの挨拶ぐらい言えー！」

「・・・くたばれデコ女」

「言わした私が馬鹿でしたー！」

そして歩き始めたかと思うと

「あっ」

「・・・あ？」

「お礼言うの忘れてたー」

平沢が田井中達のほうに向いて

「みんなあー！。本当にありがとねー！私、ギター買ったら毎日練習するねー！」

それを聞いた田井中らは若干驚きながらも笑っていた。
俺が今のこいつらみたいに笑ったのはいつだったか・・・

「りゅうくんも今日はありがとう！ギター買ったら一緒に練習しようね？」

「・・・勝手にしろ」

やっぱり、無邪気な笑顔はニガテだ。

だけどそんな風に笑えることが少し・・・ほんの少し羨ましいのかも知れねえ。

今日は二日目のバイトだが

「！つうわけで今日は一日中田井中が昼まで休憩なしだ。問題はねえよな？」

「何でだー！！」

「昨日は律のせいで龍斗が一日中働いたんだから、今日律が同じ目

にあうことに問題はないんじゃないか？」

「そんなあゝ……………」

「じゃあ頑張れおデコ女（笑）」

「「お」までつけるなー！！」

という会話の下、今日は休めるので特に疲れることもなく無事に終了。

今はバイトの責任者と話しているところだ。

「二日間お疲れ様」

「「「お世話になりました」」」

「……………したー」

めんどくさいので紛れて言った事にした。

交通調査のバイトも今日で終了したので、今日貰った金を渡すことに…………ハア。

「はい」

そう言いながら平沢に今回手に入れた金全員分をわたす

「一日8千円かゝ」

「お母さんに前借りした5万円と合わせても、まだ全然足りないわねえ」

「一日五人分を二日だから2倍しても8万円かよ……。平沢の前借金5万と合わせても後12万はいるなア？」

「後何回かバイトするか」

「そうですね」

「ハア……」

「……やっぱりこれ、いいよ」

「「え？」」

「……は？」

まだ金が足りないことで相談していると平沢がさつき渡したバイトで稼いだ金をそれぞれに返してきた。

「バイト代は皆、自分のために使って」

「唯ちゃん……」

「お前はそれでいいのかよ？」

「うん。私、自分で買えるギターをかう」

「唯……」

「一日でも早く練習して、皆と一緒に演奏したいもん。また楽器屋さんに付き合ってもらってもいい？」

「「うん！」」

「……………」（本当によくわかんねえ奴だな……）

「皆ありがと〜♪じゃあ帰るね」

「うん」

「また明日」

「じゃあね〜」

「じゃあねみんな〜」

「…………デコ」

「さらっと言うなよ……」

最後に田井中にある程度のダメージを与えてから歩きで帰り始めるが、途中平沢が急にエアギターをしだし痛い子だったのでそこはスルーした。

それよりもひとつだけ気になることがある……。

「お前……本当にあのギター買わなくていいのか？」

「うん」

「本当にか？・・・俺にはお前が無理してるようにしか見えねえがな」

「・・・本音を言っちゃうとすごくほしいよ？でも皆に迷惑はかけたくないし、それに早く皆と演奏がしたいんだ」

「・・・そうかよ」

帰り道でそれ以上話す事はなかった。

↓次の日の放課後↓

平沢達と「10GIA」へ行くついでに、前買い忘れたギターを買いに来た俺は平沢達とともに地下へとエスカレーターで降りていく。そして楽器店内をうろついてギターが置かれているエリアに来たときだ。

「あ・・・」

「ん？」

急に聞こえた平沢の声に俺らは全員振り向いてみると平沢はレスポ

ールの前で止まっっていて、こちらに気づいた平沢が笑って誤魔化してきた。

・・・平沢。お前らしくもねえな。

（父さん。たまにはあんたの言葉にのってやるよ）

「よっぽど欲しいんだな」

「よっしゃ！ やっぱりまたバイトを」

「あ！ ちょっとまってて」

「いやお前こそまって」

「え？ どうしたの龍斗君？」

（間違ってるかもしれないがこの店、お前の父親の会社の系列か何かだろ？）

（何でわかったの！？）

（前ギターを何処で買うかパソコンで調べてるときにここも調べたら琴吹って名前があったからだ。で、何かしらの方法で値段を下げようよ）

（うん。唯ちゃんのためにあのギターを値切ろうかなって！）

（まあわからなくもねえけどよ、自分の父親に迷惑かけるのはどうなんだよ？）

(でもこうでもしないと唯ちゃんがギター買えないし・・・)

(じゃあお前の会社にもデメリットなしで、平沢が損をしないでギターを手に入れられる方法があるとしたら?)

(・・・!そんな方法があるの龍斗君?)

「「「?」」」

琴吹と内緒話でのサウンド会話を終わらせまず俺がすることはいたって簡単だ・・・後の三名が俺と琴吹が話している内容が聞こえないからか「?」を浮かべているがそんなの知らねえ。

まず自分の買おうとしてた白基調で少し黒色のあるストラトキャスターを取り、次に平沢の前にあるレスポールを取って「え?りゅうくん?」そのままレジへと持っていく。

「このギター二つとも買うんで会計頼む」

「二つともですか?わかりました。では2系とギターケース2つで合計31万6560円です」

そうして50万円の半分以上を琴吹の会社に貢献し、買ったギターと付いてきたギターケースを持って平沢達のもとに行く。

「なア?これでお前の会社にもデメリットを出さず、平沢も払わずにすむ『方法』ってわけだ」

「でもそれじゃ龍斗君が「別に問題はねえから気にすんじゃねえよ・

・・」

「だけど31万って結構高いだろ？いいのか？」

「元々50万持って来てたからなあ。一応予算内だ」

「何でそんなに持ってんだよ（るんだ）！？」

ある程度質問に答え終わると何故か動揺した平沢が俺のほうに来た・
・かなり遠慮がちで。

「りゅ、りゅくん？その・・・本当に私のも買ってくれたの？」

「何だ？このギターいらねえのか？だったら返してくるが」

「ほしいです！！でも25万だよ？タダで買ってもらっていい金額
じゃないし・・・」

「チツ・・・めんどくせえな。さっさと受け取れ天然」

「うっ」

あまりのじれったさにイラついてきた俺は、めんどくさくなったの
でレスポールとギターケースを平沢に押し付ける。

「・・・・・・ありがとりゅくん！！お金はちゃんと返すから！
！」

「いやいらねえし。つか返せないだろどうせ・・・」

「太っ腹だな龍斗〜！（唯のことが好きなのか〜？）」

耳元で田井中がくだらないジョークを放ってきた。

それにしても、「好きなのか」だ？その感情がなくなってる俺に言うのか。

「それはねえよ。ただ、父親のことを思い出したただけだ・・・」

「父親？」

「お前には関係ねえ・・・」

「？」

（父さん・・・。あの金はあるのだし、たまにはこういうことに使っても問題はねえよな？警察にはもうなる気はさらさらねエけど、些細なことならあんたの言葉を守るかもしれないからよお・・・）

「ふん！」

そんな掛け声と共にギターを構える平沢。

「「「おおー!!」」」

「へへっ♪」

ギターを買った次の日。平沢は上機嫌でギターと共に登校して来て、今こうして現在に至るわけだ。

「ギター持つとそれらしく見えるね」

「なんか弾いてみて!!」

「ん・・・「チャラリ〜ララ♪　チャラリララ〜♪」

田井中と秋山は呆れ顔に、琴吹は苦笑。
まあそうなるわな・・・。

「・・・チャルメラかよ」

「まだ・・・全然練習してないの?」

「いや〜だってギターってキラキラピカピカしてるからなんか触るのが怖くて〜」

「ああ〜わかるわかる!」

「鏡の前でポーズとったり、写真撮ったり、添い寝したりはしたんだけど〜」

「弾けよ」

「それがこいつだ。諦めろ田井中」

「・・・そうだな」

「そういやギターのフィルムも外してないもんね」

それを聞いたとたんに田井中が震えながらも

「トリャー！ー！！」 ビリッ

外した。

「ああ！・・・あ、ああ・・・あ・・・」

何でかフィルムが外されたことにより平沢のテンションが底まで落ちていった。

「なんちゃって！」「律！謝れ！！」「ゴメーン！！ほんの出来心だったんだゴメンね唯ちゃん！！！」

「唯ちゃん。お菓子お菓子」

「そんなもので機嫌が」

「はむはむはむ♪」

「なおったあ！？」

「菓子がこいつへの最終兵器で決定だな・・・」

そして食べ終えた平沢が田井中の手をとってこう言い放った。

「そうだよな。ギターってやっぱり弾くものだよね。ただ大事にしてるだけじゃ可哀そうだよな・・・！ありがとう！っちゃん！私やる気出てきた！！」

その言葉に調子にのった田井中が

「そ、そうか！？唯が練習するきっかけになればと思って「せいっあ痛！！」

「・・・ナイスチョップだ」

秋山から直接制裁が下った。

「そういやりゅうくんのギター姿まだ見てないよ？」

「別に見るものでねえだろ・・・」

「でも見てみたいかも！」

「・・・ハイハイ」

そうして今度は俺がギターを構える・・・田井中はもう復活しているようだ（チッ）

「」「」「おおう！」「」

「なんかスゲー様になってるなー」

「りゅうくん本当のミュージシャンっぽい！」

「本当に様になってる・・・」

「ですねー！」

なんだこの状況・・・まだギターを構えただけだぞオイ？

「りゅうくんも何か弾いてみて！」

「・・・あんまし弾くもんねえぞ？」

「いつそのことチャルメラでいくか？」

「それは止めとく・・・じゃあ弾くぞ」

♪♪♪♪♪

まだそんなに覚えていなかったので昨日少しだけ覚えた「カルマ」でも弾いてみた。

でも・・・案外悪い気分じゃない。むしろ楽しいのか？・・・いやねえな。

「♪♪・・・1番しか覚えてねえからこつからさきは弾けねえわ」

「ひ、弾けてる・・・！」

「何で弾けるんだ・・・!？」

「帰ってから一応コードだけは全部覚えたからなあ。暇になったんで少し曲で練習してただけだ」

「早っ!？」

「すごいな・・・こんな早く覚えるなんて」

「驚きました・・・」

「りゅうくんすごい!」

「・・・もう終わったんだがらさっさと練習でもしろよ」

「あ、そうだな!じゃあ練習するかー」

「ねえねえ?ライブみたいな音出すのはどうしたらいいのかな?」

「アンプにつないだらでるよ」

そうして平沢のギターをアンプへとつないでいき、音量を調節する。

「よし!いいぜ唯」

「うん・・・」

『ジャラアアアアアアアアアアン!!!!』

・・・すげえな。繋ぐとここまで変わるのか。

「・・・かっこいいー!!」

「やっとスタートだな」

「私達の軽音部」

「ええ」

それぞれにも何かしらの感動はあったようだ。

「夢は武道館ライブ！」

「「「ええ!?!」」」

「卒業までに!!」

「「「ええー!?!」」」

「デコの中身はお花畑か・・・」

『チャラリ〜ララ♪ チャラリララ〜♪』

そんなときに平沢がアンプに繋いだままチャルメラを弾いたため全員のテンションが低下した。

「ごめん。まだこれしか弾けない。アンプで音を鳴らすのはもう少ししてからだね〜?」

— 13 — (後書き)

龍斗は記憶力がいいだけなので完全記憶能力というわけではありません。後ギターの腕もまだ一般レベルです。そのうち上がるかもしれません。

— 14 — (前書き)

タイトルの形を変えてみることにしました。後平日はリアルに忙していたため更新率が低下してしまいます・・・すいません m (| |) m

「ギターの弦って怖いよね。細くて硬いから指切っちゃいそう」
ミヨーン

平沢が弦をいじりながら田井中に話す。

「そうだぜ。気をつけないと指が切れて血がドバァっと！」「キヤア
アー！！」

「うっせえ・・・」

田井中の言葉を聞いた秋山が、何故かは不明だが急に叫び声をだした。

結果として本日2度目の耳へのダメージとなっちまったか・・・イ
テェ

「瀞ちゃんが悲鳴を？」

「い、痛い話は駄目なんだあ（TT）」

こいつビビリか・・・。

「・・・痛い話「も」の間違いだろオが」

「そうだけどお・・・」

「大丈夫だよ滞ちゃん。ほんとに血が出てるわけじゃないから」

未だにしゃがみ込んで聞きません姿勢を保っている秋山を落ち着かせるべく、

平沢が本当に血が出てないことを手を見せて証明していた。

「あ、・・・おほん！まあ練習してるうちに指の先が固くなるから血が出たりすることはないよ。ほら」

そう言って今度は自分の手を平沢に見せる・・・てか明らかに誤魔化したよなこいつ？

んで平沢は差し出された手の指の先が本当に固くなってるか確かめるためかは知らないが触り始めた。

「うはあゝ♪本当だゝ！プニプニゝ♪」

5秒経過

「プニプニゝ♪」

15秒経過

「プニプニゝ！♪」

「あの・・・もういいかな？／／／／」

「も、もうちょっとだけ！！」

本当に練習する気あるのかこいつら？

その後も結局まともな練習をせずに解散となった。

〳次の日〳

「龍斗〳！一緒に帰ろうぜー！」

「パス」

「しないでくださいよ〳！？」

放課後になり今日は部活がなかった気がするが、悠二と帰ると疲れるので丁重にお断りさせていただいた。

「…………お前今日部活は？」

「今日は休みで特になにもないんだよ…………だから、な！」

それで俺と帰ろうと…………ハア。

「へぶしっ!」

イラッときたので横腹にジャブを突っ込んだ。

「さ、さすが龍斗……キレが違う……ぜ」

うずくまってゴミが感想を言ってきたくれるが正直どうでもいい。

「つかよォ?こんなめんどくせえ時に涉は何処行ってた?」

「すうーはぁ……何でも中間テストの勉強だとか言ってたぞ?」

「……ああ。そういやそんなこと行ってたな」

『♪～♪～』

話していると携帯が電話の音のほうで鳴り出したので画面を見てみると

「平沢?何か用かあいつ?」

「ん、唯ちゃんからか!いいよな」龍斗は女子にモテて……畜生!

「ハア?……まあ出ておくか」『Pi』

さっきの話は後で聞くとして、めんどくさいが携帯の通話ボタンを押し、顔の右へと携帯を寄せる。

「何だ平沢?」

『あ、りゅうくん今何処にいるの?』

「何処って今帰ってるとこだが・・・?」

『ええ!? 今日部活あるよ!?!?』

「・・・・今日は休む」

『え? ちょっとまつ』『P.i』

これ以上追求されるとせっかく家の近くまで来ているのに戻される気がしたため、強制的に通話を切った。

「で、唯ちゃんからは何だって?」

「今日部活あったってよ・・・めんどくせェからサボることにしたがな」

「おいおい・・・せっかく唯ちゃんが呼んでくれたのにそりやないぜベイビ〜」

「黙れ後語尾にベイビ〜とか付けんなキモイ」

「そんな一気に言わないでくれませんか!?!?」

暇つぶしに悠二にダメージを与えたところでさっきの疑問を聞いてみることにした。

「で? 俺がモテるってどういうことかなア?

ふざけて言ってるなら即テメエの股にぶら下げてるウィンナーとミートボール潰してやるから正直に言いやがれ」

「あれです！龍斗って結構クラスで人気高いんです！！言ったからそんな男限定の死刑宣告やめたげて！！」

「ハア・・・？ふざけてんのか？」

「マジだって！女子と話した時だけどさ」

俺が知り合ったクラスの女子と話しているときのことだ。

「ねえねえ悠二君。古川君ってどんな人？」

「私も気になる！普段は怖い感じだけど授業中寝てる時の顔みたらキヤー！ってなっちゃったの！」

「私はクールなところが好きなのよね」

「「で、どうなの悠二君！？」」

「はー・・・龍斗って結構人気なんだな」

「・・・てわけでして。元女子高だからかわからないけどうちの高校かわいい子多いしな！俺もモテてー！」

「・・・・・・・・・・」

「あれ？・・どした？」

「・・・いや、そういうことにはどう反応したらいいのかわかんねエだけだ」

違う。忘れただけ・・・これも違う・・・

「俺だったら喜ぶZE☆」キラッ

「下心満載のコメントアリガトウ」

・・・・・・・・出来なくなったのか。

「おかしい・・・！こんな時いつもなら俺に致命傷を負わす筈！何故だ！？」

「お前に触りたくねエだけだ」

「それはそれで傷つく・・・」

駄目だ、吐き気が・・・。

「あ、もう着いちまったのかよ！つまんねえ！」

話しているうちに俺の家の近くまで来ていて、さらに5分ほどした場所に悠二の家があるためここからは悠二一人で帰らなければならぬ。

「・・・・・・・・じゃあな」

「おおゝまた明日なゝ！」

そう言いながら俺は家へと入っていった。

—side—源 悠二

俺は龍斗と別れて一人で自分の家へと帰宅している。

今日は部活もないのでなんとも暇な日だが・・・・ひとつやっちゃいけない事をしてしまったようだ

（やっぱり好かれてるだのそういう感情系の話は駄目だったか）

あの時、確かにわかったことがある。

（あの話をした後、いつもなら殴ってくるのにしなかったし・・・・
なによりあいつの顔が一瞬だけ『あの頃』に戻った）

やっぱり、まだ残ってるのか・・・・？

—side—平沢 唯

「で、龍斗は何だって？」

「今日は部活休むって・・・」

今日部活に行こうとした時にりゅうくんがいなかったから（先に部屋に行ったのかな？）と思い部屋に行ってみてもいなかったので、さっき電話してみたら・・・ということだった。

「龍斗今日は来ないのか？」

「どうせサボりだろー（笑）」

「りゅうくんにギター教えて欲しかったのに」

「じゃあこれ使う？」

「「さるでもわかるギターコード」・・・なんかバカにされてる気がするよ滞ちゃん？」

「だ、題名はあれだけど内容はわかりやすいから」

これでわからなかったら私ってサル以下なのかな？・・・なんかやだな。

「そういえば龍斗君のお菓子どうしようかしら？」

「「私が食べる！！」」

「食い意地張りすぎ・・・」

— t w o s i d e o u t —

（中間テスト日）

今は教室でテスト中・・・

（ハア・・・めんどくせエ）

確かに大学までは学力という武器になるので一応覚えてはいるが、正直大学以降ほとんど役に立たない知識を試したところで何になるのだろうか？と思いながらも答案用紙に書き込んでいく。

そうして3日間の中間テストが終わり、今はいつものクラスメンバーで話している。

「テストの感触はどんな感じだった？」

涉が俺と真鍋のほうに向いて聞いてきた。

「いつも通りで特に何もねエな」

「そういいながらも理数系はほとんど100点いってるんだろう？」

「あれは基礎さえ覚えてれば考えようでどうとでもなるしなア」

「龍斗ってそんなに頭いいの？」

「ああ、昔からテストで20位以内だったぞ」

「案外龍斗ってすごいのね。・・・それよりも」

「ああ、・・・あの二名？」

「あいつらテストでミスったか？」

そう言って平沢と悠二のほうを見る。

二人とも同じ空気を漂わせながら「どうだった唯ちゃん・・・？」

「真っ白です・・・」・・・ミスったではすまされないことを話し合っていた。

「唯、悠二・・・テストどうだったの？」

「「・・・全然♪」」

「それ笑顔で言うことじゃないだろ」

「・・・似たもの同士はテストも似てると」

こいつら追試とかあったりしてな・・・いやさすがにない・・・
とは言えねえか。

— 15 — (前書き)

中間テスト編中間です。後感想や指摘など書いていただけるとうれ
しいです。

—音楽準備室—

テストも先週で終わり答案が返された日の部活。

「んん〜！やあっとテストから開放されたー！」

そういうながら体を伸ばしてリラックスする田井中

「高校になってから急に難しくなって大変だったわ」

中学と違って難しかったと言う琴吹

「そうだな。そして・・・」

「あっはっはっはっ・・・」

「もっと大変そうな奴がここに」

秋山の言葉でさっきから魂の抜けたような笑い声のほうを顔だけ向けると、自分の答案用紙を持ちながら「あっはっはっは・・・」言い続けてる平沢が。

「そんなにテスト悪かったのか？」

「ふっふっふ・・・クラスでただ一人、追試だそうです」

「うっせえんだよ爆音野郎がアアア!!」

「グベッ!？」

あまりのサウンド量にボルテージを超えたので軽く本気に腹を蹴ったところ、威力のせいか2メートル近く床に倒れてから吹っ飛び続けた。

「悠二君大丈夫!？」

「私古川君がキレたところ始めてみたかも・・・でもいい／＼」

「そんなこといってないでこれどうするんだよ？」

吹っ飛んだ方向を見るとクラスの女子と少数の男子が悠二を見ながら話し合っていた・・・。

――――というわけでギリギリで追試はないらしい・
・チツ

話を戻すが数学?の答案用紙を見た後3名は「うわぁ・・・」な顔をしている。

「だ、大丈夫よ。今回は勉強の仕方が悪かっただけじゃない？」

「そうそう。ちょっと頑張れば追試なんてよゆーよゆー！」

「うんうん！」

「勉強はまったくしてなかったけど」

ああ・・・空気が凍ったぞオイ。田井中と琴吹の応援は無駄になったア？

「・・・励ましの言葉返せこのヤロー！！！！！」

「無理だろ・・・」

だいたいどうやって返すんだよ？

それから菓子を食べ数分たった。

「なんで勉強しなかったのさー？」

当然の疑問を田井中が平沢に聞く。

「いやーしよーと思ったんだけど。なんか試験勉強中ってさ、勉強以外のことに集中できたりしない？」

「あーそれはあるなー。部屋の掃除はかどったりなあ」

「でしよー。勉強の息抜きにギターの練習したら抜け出せなくなっちゃって。結局全然勉強できなかったのー」

「テスト勉強ほったらかして練習したんならそれなりには覚えたんだよなア？」

それで対して覚えてなかったら赤点とった意味もねえしな・・・

「うん！おかげでコードいっぱい弾けるようになったよ！」

自信があるのかピースしながらの宣言。だが赤点付きだからか決まらねエなア・・・

「その集中力を少しでも勉強に回せば・・・」

「そういうりっちゃんはどうだったのさ〜！」

「あ、私？」

鞆から数学？の答案用紙を取り出し

「余裕ですよこのとおりー！！！」

89点を平沢に見せ付ける。

「こんなの・・・りっちゃんのキャラじゃないよ・・・」

「・・・それには激しく同意する」

「ホ〜ホッホッホッ！私ぐらいの人間になると何でもそつなくこなしちゃうのよ♪」

「りっちゃんは私の仲間だって信じてたのに……」

「ホッホッホッホ「テストの前日に泣きついてきたのは何処の誰だっけ？」うおちょよ!?ばらすなよ!!」

結局人に頼っていたことがばれると、平沢が同情するかのように田井中の肩に手を置き

「それでこそ、りっちゃんだよ」

「赤点取った奴に言われたくねー!!」

「お前……哀れだな」

「りゅうくんまでそんなこと言わないで……」

逆に励ましたが田井中のほうが正論なので平沢が本当に哀れに見える。

「滯ちゃんとムギちゃんは何点だったの？」

「はい」

「どうぞ」

そう言われると秋山と琴吹は答案用紙を平沢に渡す。

（共ほとんどの教科が90点代後半か。さすがってところか……）

「ほえ」

「……！ま、まあそんなもんだよなー！私ポカミスしちゃったからさーハハッハハハッ……頼むから何か言ってくれー（TT）」

答案用紙と田井中を見比べて何も言わずに頷いたのが気になったのか返信を求めている。

「りゅうくんも見せてー」

「めんどいから勝手に鞆からだせ……」

「ほーい………おおー半分ぐらい満点だよーっちゃん
！」

「何ー！」

そうやって俺の答案用紙を田井中達にも見せ始め……勝手に触らせるんじゃないかなア

「……マジで満点あるし」

「理数系が全部満点だな。得意なのか？」

「まあ基本的にな……」

「すごいですねー♪」

「でも英語は平均ぐらいだなー」

「英語はめんどいから勉強してねえんだよ」

「それで平均までとれる龍斗もどうかと・・・」

今日は中間テストで疲れているからか練習は特になく部活は終了した。

・・・つか最近練習とかまともにしてなくねエか？楽だから別にいいんだけどよオ。

一次の日ー 音楽準備室内

テストの件について職員室に呼ばれていた平沢が戻ってきた。

「あ、今日は羊羹♪」

軽快な感じで席に座り食べ始め

「は〜む〜モグモグ・・・追試の人は合格点取るまで部活動禁止だっ
って」

「「「ええ!?!」」」

「・・・・・・あっそ」

「あっそで収まることじゃないだろ!」

和やかな空気を一瞬で破壊した。

「結構厳しいな・・・」

「そしたらここにいるのもまずいんじゃない」「大丈夫だよ。お菓子食べに来てるだけだし」そっかーそれなら安心だ・・・ってなんでやねん！！」

「ギブギブギブギブギブ」

平沢の発言にキレた田井中が首に腕を引っ掛けて絞めたことにより平沢からギブが連続で発せられている。

「あ、でも龍斗はいるから部活が廃部することは避けれるんじゃないか？」

「そこはいいとしても、また勉強しないで追試をやり続けられたら文化祭でアウトだろ」

「そこまで続かないと思うけど練習する時間は確かに減るな・・・」

「逆にそこまで続くことのほうが奇跡だと思うんだけどよォ？」

「「だな」」

「唯ちゃん。追試はいつあるの？」

ここでやっと平沢が首絞めから開放された。

「一週間後にだって」

「一週間後かゝ・・・」

「それだけあれば毎日ここに来て大丈夫だよね♪」

・・・・・・はい？

「だあもう！そんだけしかないの！！」

「お前だけギター弾けなくてもいいのかよ？」

「うっ、それはやだよ」

「じゃあ追試に備えて一週間は勉強しろ・・・」

「うん。頑張って勉強する！」

また勉強しねエとかねエよな・・・？

—side—平沢 唯 PM9..23自宅内

「さてと、やるぞー！」

追試を終わらせてムギちゃんのお菓・・・みんなと部活をするため

にがんばるぞ！っていきこんでみたのはいいけど部屋は散らかってるし机の上は漫画とかお菓子のゴミとかでいっぱい・・・。

「なんでこう散らかってるかな？」

このままではできないので漫画や本を本棚に入れて教科書とかを整理していると前に濡ちゃんから貰った「さるでもわかるギターコード」の本が・・・

「あ・・・」

いや勉強勉強！でもまだ6日あるしちょっとくらいなら・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

「~~~~~」

結局唯はギターのほうに集中してしまい、気づいたころには午前1時を過ぎていた。

「あ、もうこんな時間・・・！お風呂入って寝なきゃ！」

まだ入っていなかったから、ギターをベツトに置いて風呂場に行くことにしたけど・・・何か忘れてる気がするんだよねーまあいいか♪気にしたら負けだね！

—side out—

—音楽準備室—

追試まで後6日を切った。といってもまだ一日だけしか経過しては
いないが。

「はむ・・・なんか唯がないと張り合いが無いな」

「その割にはよく食ってるな？」

「デコも光ってるなア？」

「へへーそれとこれとは話が違いますわん♪・・・つかデコ言うな
って言うてるだろー！」

その言葉通り未だに今日の菓子っていうよりデザートプリンアラモードを普通に食べている。

「唯・・・ちゃんと勉強してるかな？」

「んゝ大丈夫なんじゃない？」

「・・・あいつのことだから予想は通じねエぞ？」

「なんか尚更心配になってきた・・・」

そしてなんだかんだで追試前日。

「というわけで澪ちゃん助けてゝ!!！」

「え!?!勉強してきたんじゃないの!?!」

「できなかったあゝ! (TT)」

「ええー!?!」

軽くマジ泣きで秋山に頼み込む平沢が今日の前にいる・・・

「・・・ハア。なんとなくわかってはいたがなア」

「どうしようゝ・・・ (TT)」

「うゝん・・・・・・・・よし！今晚特訓だ！」

「本当！？ありがと滞ちゃん！！」

「滞に教えてもらえば確実に合格点取れるぞー！」

「いや／＼」

褒められたのがうれしいのかテレ笑いをしている

「うまいんだぜー？一夜漬け教えるの！」

「うおおい！？普通に教えるよー！！」

・・・一日でこいつの頭に知識が吸収されるかが心配なんだが。

— 16 — (前書き)

中間テスト編なんとか終わりそうです。後半分ぐらいオリジナルになっちゃったので間違ってる部分があるかも・・・。

P M 5 .. 3 6 住宅街道路

あの後、勉強できなかった平沢のために平沢家で勉強を教えることになり今向かっている。

ギターを買ったときはまだそこまで暑くなかったためブレザーを着てても問題はなかったが、今は6月中旬。

だんだん気温も上がり尚且つ湿気も高いため非常にイライラする季節だ。

田井中は冬服でも対して変わらなかったが制服を着崩して、平沢らは普通に着て、俺は中にシャツを入れたくないので田井中同様シャツ出しという着こなしで歩いている。

「今日はお父さんが出張でね、お母さんも付き添いでいないから気兼ねしなくてもいいよ」

「あれ？妹がいるって言ってなかった？」

「うん。妹は帰ってきてると思う」

「それだと迷惑にならないかしら」

「「唯ちゃんの妹か・・・」」

平沢がもう一人いる感じだと最初は俺も思ったが、バイトの時弁当

を作った憂とかいう奴のことだとすると平沢とは違うか・・・？

「ぜんぜん大丈夫なんじゃない？」

「そうかな」

「ですね」

それぞれ考えが同じだったのだろうが3人とも笑って馴染めそうだ
と知っているようだ。

そんな話をしていると平沢の家が見えてきたので、俺は帰ることに
した。

「・・・じゃあな」

「」「え？」「」

「え？じゃねえよ・・・。俺は行くとは一度も言ってねえぞ？」

「じゃあ何でここまで来たんだよー？」

「俺の家がこの先にあるからとしか言い様がねえんだが・・・」

「そういえば龍斗もこっちだったな」

「そういうことだ」

理由は言い切ったと思い自分の家へと歩き始めようとする

「えーりゅうくんも軽音部なんだし入ろうよー！」

「そうだそうだー！部長命令だぞ！」

軽音部という理由をつけて俺を引き戻そうとしてきた・・・

「帰っていろいろやらなきゃならねェからパスだ」

「いろいろって？」

「・・・夜食の準備とかそんなところだ」

実際は家事全般だけだな

「親に任せればいいじゃん」

・・・それが出来ねェからやってるんだっつのこのデコが

「親は今出張でいねェんだよ」

「じゃあうちで作ればいいんじゃないかなー？」

「お前の妹に迷惑だろオが・・・」

「私から言うから大丈夫だよ。だから、ね？」

「・・・なら別に断る理由はねェけど」

「りっちゃん隊員！りゅうくんを確保しました！」

「よしでかした平沢君！さ、それをさっさと入れてしまえ！」

「人を物扱いすんじゃない」「了解！」オイ自分で歩けるから押すなっ
つの！」

また丸め込まれたっていうのかこれ・・・ハア

「さすが唯と律」

「ですね♪」

そんな会話が後ろでされていたことは、龍斗には聞こえなかった。

「はい上がって上がって」

「「おじゃましま〜す」」

平沢の家に入り秋山と琴吹は礼儀正しく挨拶をし、残り二名は

「いい加減に押すのを止めろ」

「「え〜」」

「じゃねェよクソ共・・・」

「まあ！乙女にクソだなんて・・・！」

「デコの間違いだろ？」

「何をー!!」

そんな言い争いをしているとリビングのほうからだと思うが知らない奴が出て来た。

・・・こいつが憂か？

「あ、お姉ちゃんお帰り。あれ？お友達？」

「うん」

「始めまして、妹の憂です。姉がお世話になってます」

そう言うってから靴箱に近づき、中から俺達の分のスリッパを取り出し前に並べて置いていく。

「スリッパをどうぞ」

（（出来た子だ・・・!!））

そこからスリッパを履いて二階の平沢の部屋へと上がっていった。

今思ったが男が俺だけって何か意心地悪イな・・・

ー平沢の部屋内ー

女子四人は机にそれぞれ座り、俺は壁によりながら座っている。

「いや、姉妹でこうも違うもんかね？」

「何が？」

「妹さんに、唯のいいところ全部吸い取られたんじゃないの？」

「ひっどい！それはあんまりだよりっちゃん！」

「ひひっ」

そんな会話をしているとドアを軽くたたく音が聞こえた後、平沢妹が入ってきてお茶などを持ってきた。

「あの、皆さんよかったらお茶どうぞ。買い置きのお菓子で申し訳ないんですけど」

（（（本当に出来た子だー・・・！）））

そして机にお茶と菓子を置いていく。

「憂ちゃんは今何年生？」

「中3年です」

「おおー、ひとつ違いじゃん」

「受験生ですねー♪」

「はい」

「何処受けるかもう決めてる？」

「うーん・・・出来れば桜ヶ丘高校に行きたいんですけど、私の学力で受かるかどうか」

「お姉ちゃんでも受かったんだから大丈夫だよ」

「逆に何で平沢が受かったのか聞きたいがな・・・」

「受験の時はちゃんと勉強したんだよ！」

「お姉ちゃんに勉強教えてもらったらいいんじゃない？」

そう秋山が言った後、平沢も頷くが

「え！？それは・・・自分で出来るから」

妹のほうは一緒に暮らしているからだろう。自分の姉がどういう奴かわかっている故に遠慮がちに拒否した。

「アハハハッ！断られたぞー！」

「ええ！？何で何でー！？」

断られた理由が思い当たらないようだ。

「赤点とったからじゃねエのか？」

「ガーン・・・！」

「それを言ってやるなって」

バツサリと思い当たる節を言ってみると平沢はショックを受け田井中に止められた。

「で、でも！お姉ちゃんはやる時にはやる人です！」

（（・・・やっぱり出来た子だー！））

「えへへへ／＼／＼」

そこに妹が姉の尊厳を守るためかフォローを入れてきた・・・この子本当に平沢の妹か？

「つか平沢。台所借りていいのかよくないのかどっちだ？」

「あ、憂。りゅうくんが夜ご飯作るのに貸してほしいんだって。いいかな？」

「そうなんですか／＼それなら別にかまいませんよ。食材とか用意しときましようか？」

「それは自分で買うから問題はねエ。貸してもらっただけで十分だ」

「わかりました。じゃあ私は台所を整頓しておきますね」

そう言って平沢妹は部屋を出て行った。

「・・・出来すぎだろ」

「確かにー」

今俺は食材を買うために平沢家を後にしてスーパーへと入っていく。

後、食材を買いに行こうと下に降りたときに平沢妹から食材が足りないから買ってきてくれませんか？とかなり遠慮気味で言われたため（台所借りる身でもあるため）断れず一緒に買うことに。

（つかそもそもあの時帰っていれば買いに来る必要もなかったんだけどなァ・・・）

そう思いながらも今日の夜食の食材と平沢妹に頼まれた食材をカゴに入れていく。

（・・・一人分だけ作って終わりつつのもなんか悪イし、やっぱり何か振舞ったほうがいいか？）

ふと思いついたのもう一度食材売り場まで戻り2，3人分ほど余分に買ってレジで集計し、スーパーから出て平沢家に向かう。

ガチャッ

玄関を開けてリビングにある台所へ向かう。

「平沢妹。お前に言われた食材買って来たぞ・・・」

「あ、龍斗さん。ありがとうございます」

そう言って机に食材の入った袋を置いて台所に向かう。

「龍斗さんは何を作るんですか？」

「アア・・・今日は魚が食いたい気分だったから魚の身を切って刺身にでもするつもりだが」

「じゃあ醤油とか机に出しますね」

（何だこのサポート万全っ子は・・・？）

んで袋から買ってきた鮪やサーモンなどの身をパッケージから出してまな板に置き、包丁で一口サイズに切っていく。

後は刺身を盛り付ける皿に刺身自体を買うときによく一緒に入っている千切りにした大根をのせ、その上に切った刺身がある程度考えて置いていき青じそなどをのせていく。

「妹。刺身食えるか？」

「え？食べれますけど」

「・・・そうか。一応お前らの分も作っておくから食べたかったら食べていいし、いらなかったら捨てておけ」

「いいんですか頂いちゃっても？」

「台所貸してもらったし一応感謝も込めてってことだ・・・」

「ありがとうございます。じゃあ後でお姉ちゃん達と一緒に食べさせてもらいますね」

「・・・そうか」

それから数分後――――

「まあ久しぶりに作ったにしては上出来か？」

「店に出せそうなくらいにキレイですね」

「そりゃありがとさん・・・」

出来た刺身を乗せた皿を机に置いて、それを見た平沢妹が店で売られているのと同じようだと言った。

作った側としては悪い気分じゃねェな・・・。

んで自分の分を食べ始めると平沢妹が話しかけてきた。

「龍斗さん。お姉ちゃんって学校ではどうですか？」

「・・・赤点、天然、ドジ、時々意味不明な行動をする」

「うう・・・。でもお姉ちゃんにもいいところはあるんですよ？」

「ああ。悪い奴ではないのはわかるがな」

「はい。お姉ちゃんは確かにちよつと抜けてるところはありますけど、心の優しい人です。それにお姉ちゃんって見てると癒されるんですよ・・・龍斗さんって、もしかしてあの中の誰かと付き合ったりしてるんですか？」

少しシスコンな部分が見えた気がしたが変な質問によってその思考は吹っ飛んだ。

「は？・・・いや付き合っちゃいねえけど何でそんなことを聞ってくる？」

「その、最初見たときに（この男の人誰なんだろう？・・・まさかこの中の誰かの彼氏！？）って思ってたので聞いてみたんです。不快にさせたならすいません・・・」

そういうと平沢妹は俺をイラつかせたと思ったのか徐々にしょんぼりしていく・・・めんどくせえな。
つかそういうところは姉妹一緒か・・・。

「だから謝るなよ。気にしねえから・・・一応言っておくが俺が来たのはお前の姉とデコに強制連行されたからだ。だから変な誤解するんじゃない」

「え？お姉ちゃんと律さんが？」

「部活が一緒ってだけで行く気はなかったがこの通りだ・・・」

「アハハハッ・・・」

「つまり俺はあいつらとは部活が一緒なだけで特別な関係は一切ねエってことだ、わかったか？」

「はい。いろいろ誤解しててすいません。でも龍斗さんってイメージと違って結構優しいですよね？」

「・・・どうしてそう思う？俺が優しい奴には見えねエだろ普通」

「でも頼んだ食材を買ってきてくれたり、私達の分の料理も作ってくれたり、お姉ちゃんのこと悪いところもいいところもわかっていてくれたり・・・十分優しいじゃないですか」

俺が・・・優しい？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・？龍斗さん、どうかしましたか？」

・・・・・・・・ありえねエ。

俺は他人を平気で半殺しにしたりするような狂った人間だ。
それが優しい・・・？

・・・・・・・・アリエナイ。

ソナモノ、アノトキニホンシンカラストタンダ

「・・・もう7時だな。そろそろ夜食にしたほうがいいんじゃないか？」

「あ、そうですね。じゃあお姉ちゃん達呼んできますね」

そう言って平沢妹は勉強しているであろう平沢達を呼びに行った。

その後は平沢妹が作った料理と俺が作ったさっきの刺身を、平沢達と途中にサンドイッチを差し入れに持ってきた真鍋なども一緒に食べながら話し始めた。

途中俺の作った刺身を見て――――――

「憂。この刺身ってそのまま買ってきたの？」

「ううん。龍斗さんが作ったんだよ」

「マジで！？店とかで普通に売ってそうな感じじゃん！」

「まあ真似て盛ったようなもんだしなア。刺身自体は市販のものだから味は普通だろうと思ってよオ？見前だけはまともにした」

「龍斗って意外と家庭的なのね？知らなかったわ」

「家事はだいたいやってるしな・・・」

「なんか龍斗って何でも出来るよな」

「家事って何だか懂れますね〜！♪」

「慣れると疲れるだけだぞ・・・」

————
わけだ。

で、俺も夜食を作り終わったので上に行きほとんどは秋山だが疲れたときに数学はできるので変わりに教えたりして9時を過ぎたころに追試の内容はすべて終了した。

そして帰ろうとして下に行くとは時からかはあまり覚えていないが田井中が平沢妹とテレビゲームをやっていた。

「また負けたー！」とか言ってるあたり連敗か・・・てか連勝してる平沢妹のほうもどうかと。

そして田井中を引き連れて「「お邪魔しました」」「・・・・した」」といってそれぞれ帰っていった。

— 追試当日 音楽準備室内 —

軽音部内では

秋山が落ち着きなくうろろう歩き

田井中はいつもと変わらず菓子を頬張り

琴吹は湯のみにお茶を注いだまま固まっております・・・って

「お茶零れまくってるぞオイ」

「え・・・あ!!」

・・・琴吹までこれか。

「唯・・・大丈夫かな？」

「大丈夫なんじゃないの？」

菓子を頬張りながら気楽に言う田井中に

「もっと心配しろ!!!」

「ひっ!？」

秋山がキレる。

なんつうか・・・カオスだ。

― 数日後、追試返却日 音楽準備室内 ―

「今日返却だよね・・・？合格点取れてるかな唯・・・」

「あれだけ勉強したから大丈夫なはず・・・」

秋山と琴吹が心配していると音楽準備室の扉が開き「真っ白になった」という比喻がいそうな平沢が入ってきた・・・

「ど、どうだった!？」

「・・・どうしよう滞ちゃん」

「え?・・・また駄目だった?」

そう秋山が言うと平沢は答案用紙を前に出し

「ひゃ、百点取っちゃった!!!」

「極端な子!!!」

平沢が満点を取った記念にと写真を撮った。
答案用紙を持ちながらピースする平沢が写る。

「でもよかった〜!とりあえずこれでひと段落だな!」

「そうだね〜!」

「みんなのおかげだよ〜♪本当にありがとう〜!」

「いや〜それほどでも「お前は何もしていない!!!」」

これで平沢が遅れることはなくなったか・・・
まあいいほうへと進んだつつうことか。

「じゃあ早速練習しましょう！」

「今日はまともやるんだな・・・」

「いつもまともだぞー」

「いつも喫茶店の間違いだろオが」

「試験勉強中にも練習したみたいだし、どれだけ弾けるか弾いてみてよ」

「へへっばっちりだから。XでもYでも何でもござれ」

「「「「？」」」」」

全員が？になった瞬間だった。

そして秋山がまず琴吹にアイコンタクトするが琴吹は首を横に振り次に俺にアイコンタクトするが俺も意味がわからないので首を横に振る。

最後に田井中にもアイコンタクトを交わすがもちろん田井中も首を横に振る。

とりあえず聞かなかったことにしたのか秋山が通常稼動を始める。

「じゃあ『C』『Am7』『Bm7』『G7』って弾いてみて」

「ほいほい。……………」

平沢が弾こうとギターを構えるが急に止まり

「……………どうしたの？」

「……………忘れた」

「「「なあああー！！」」」

全員倒れた。

「ずっとXとかYとか勉強してたから」

「また一からー！？」「えへへへ……………」

……………笑いで誤魔化したなこいつ。

「えーとこれがXだっけ？」♪

「ちよ、そんなコード見たこと無いぞ？」

その会話を聞きながら田井中と琴吹は笑いあっている。
いつもの軽音部に戻ったのがうれしいのだろうか……………

「ああ違うこうだー！」♪♪

そしてまた見たことない弾き方をする。

「漑ちゃん！これがXだよ！」

「だからそんなの無いってばー！！」

「ええ〜！・・・・・・」チャラリ〜ララ♪、チャラリララ〜♪」

「それは弾けるんかい！」

まあ、いつも通りのグダグダな部活で俺は楽だな・・・。

— 17 — (前書き)

ただ今テスト習慣で書く時間があまり無く遅れてしまいました。4
話の前半です。

「合宿をします！」

いきなりだ。本当にいきなりで、秋山が勢いよくドアを開け俺たちに指をさし堂々と宣言した。

音楽準備室に平沢と着いてみると中に田井中だけがいて琴吹はまだいないためか、それまで練習しとこうということになり————

「あうゝ指いゝ！」

「本当に忘れたんだな・・・」

「・・・赤点の意味なかったじゃねェか」

平沢が前の追試の勉強で覚えていたコードをすべて忘れてしまったため練習しているが・・・まあ変に弾こうとして指を攣り若干涙目になっているわけだ。

「えへへおばあちゃんによく褒められたんだ」。唯はほかの事

を覚えるとほかの事を全部忘れちゃう」って♪」

その婆はオブラートに包んで言ってくれたんだな・・・

「それ・・・多分違うぞ」

「それには同意する・・・」

——————————————————そんな会話の後に秋
山が入ってきて今に至る。

「合宿？」

「そう！もうすぐ夏休みだし！」

「もしかして海！？それとも山とか！」

「遊びに行くんじゃない！ありません！！バンドの強化合宿！朝から晩までみっちり練習するの！！」

だがやる気の秋山による説得もむなしく、後の二名は遊ぶことを前提に話し始めた。

「わぁー！着ていく服買わなきゃ！」

「水着も買わないとなー！」

「聞けええええええ！！！！」

とりあえず合宿の計画を立てるために秋山が皆を机に座らせて話し始める。

「夏休みが終わったらもうすぐ学園祭でしょ！」

「学園祭・・・」

「そう。桜高祭での軽音部って言えば昔は結構有名だったんだぞ？
それなの・・・に」

また秋山の話を見かずに学園祭に真っ先に反応した二名は

「学園祭・・・！」

「高校の学園祭ってすごいんでしょ？」

「模擬店！」

「焼きそば！」

「たこ焼き！」

「「わあ〜！」」

すでに軽音部の演奏のことなど忘れ学園祭を楽しむことが優先事項になっていた。

テンションが上がったのか勢いよく手を挙げ発言し始める。

「はいはい！私、メイド喫茶がやりたい！」

「えー！お化け屋敷がいいよー！」

そして秋山を間に言い争いを始める平沢と田井中。

「メイド喫茶！」

「お化け屋敷！」

・・・イラつくな。

「メイド喫茶！！」

「お化け屋敷！！」

・・・イラッ

「ほー！絶対メイド喫茶のほうが」「うるさい（せエ）！」「ドゴッ！」

イラついたので秋山が田井中を、俺が平沢を黙らせる。

「うう・・・痛いよりゆうくん（TT）」

「滯はいつも通りで痛い・・・（TT）」

「子供みてェに言い争いするテメェらに問題があるんだよ」

「私たちは軽音部でしょ！ライブやるの！」

ガチャツ

ふとドアが開いた音がしたのでそちらを見てみると琴吹が来た

「ごめんなさい。遅れちゃって。・・・ん？」

今の現状

仁王立ちに腕を組んでさっきまでアホ二名を叱ってた俺と秋山。

その下で正座しながら頭をさすっている平沢と田井中。

・・・この現状から大体を察したのか

「マドレーヌ・・・食べる？」

今の空気を菓子で変えようとした。

そして机の上に紅茶とマドレーヌを置いて皆落ち着き始める。

「まあ」

「ムギはどう思う？」

さっきまでいなかった琴吹に理由を話し意見を求める秋山。

「いくら慌てずやっついていこう、って言ってももう二ヶ月にもなるの

に一度も合わせたことないなんて」

「まあまあまあまあまあ」

「6回・・・」

琴吹のまあと言った数を何故か数えていた平沢・・・意味ねえな

「・・・行きましょーぜひ！みんなで泊りするの夢だったのー！」

「そうなんだあー！」

「じゃあ海にする？それともー」だから！バンドの強化合宿って言うてるだろー！」

秋山がいいかげんこのやり取りに嫌気がさしたのか最後あたりが裏声になるくらい高く否定する。

「っひひひ・・・」

それに押された田井中は苦笑。

「あ、でもいくら位掛かるのかな？」

「そうだぞー？きつくないか？」

「そ・・・それは・・・」

どうやらさきほどの秋山は勢いだけだったようだ。
そんな時に何を思ったのか琴吹のほうを向き

「ム、ムギ？」

「はい？」

「別荘・・・とか「ありますよ♪」

「「あるんかい！」」

「さすがお嬢様。軽く言えるあたりがすげエ・・・」

琴吹の会社って結構大きいんじゃないか？

次の日の登校時。

いつも通り涉、悠二と登校中・・・

「じゃあ夏休みに軽音部の皆で合宿に行くのか」

「・・・不本意だな」

「それより軽音部って龍斗以外全員女子じゃないか！？羨ましい・・・！」

「黙れ下心の化身が」

「そんなこと言って〜！龍斗だって本心ではピ——とかピ——などしたいと思っているはずだー！！」

「・・・まあ男だしそれはあるだろうな」

「ちょ！？そこは拒否るとこじゃねえの！？」

「お前と違って認めることはちゃんと認めんだよ」

そこがお前との違いだ存在理由0野郎

「それよりもこんな大通りでそんな話しないでくれ・・・」

渉が言うとおり、ここはそれなりの大通りで少なからずとも俺たちと同じく登校中の生徒もいる。

そんな所で自分の知り合いがさっきの話し合いなどしてればそう思うのも頷けるが

「何だァ渉？お前この歳になってもまだ下ネタ等に抵抗があるのかよ？」

「・・・ああ。やっぱり慣れなくてな」

「真面目だな〜。さすが永遠の委員長。今年も委員長&生徒会だな〜」

入学式から数日後、クラスの係りを決める時に委員長立候補者がい

なかったので推薦となり最初は真鍋と涉と後は知らない女子が拳がったが、近差で真鍋に涉が勝ってしまい今年も委員長になった。

そして生徒会選挙でもまだ一年生なので会計という手頃な役割で立候補し、当選したというわけだ。

「なんであの時和じゃなくて俺が勝ってしまったんだ・・・」

「見た目とか性格からだろーよ」

「見た目と性格つつたら涉そのものだろォが・・・」

「この話しはやめよう、何だか疲れるんだ。それより龍斗はその合宿に賛成したのか？とても龍斗が賛成したとは思えないんだが」

「ご名答・・・俺は行かねェつつたらいつもの流れで強制的にテイクアウトだ。しかも海があるから水着までもってこいと」

「というか何であいつらは男の俺が行くことに不満がないんだ？秋山も前と違い軽音部だから来なさい！って感じだったしよォ・・・」

「龍斗って案外女の子に弱かったり？」

「・・・さあな」

話している内に高校に着いたので昇降口まで歩いていく。

つか俺ってマジで女子には弱えのか・・・？

『ごめんさああああい!!』

完全に寝坊していたようだ。

「それより早く準備して来て!! 駅に間に合わないからー!!」

平沢は確か自転車を持っていないつつうことはここまで歩いてくるのに最低でも15〜20分。

後10分ほどで列車が来やがる・・・!

『でも時間がく!!』

また目的地行きの列車をまつとかめんどくせえんだよ・・・

「携帯貸せ」

そう秋山に言ってすばやく貸してもらおう。

「今から自転車ですっち行くからお前はできる限りこっちにこい」

『え!?! うん! わかった!』

そして秋山に携帯を返して

「つうわけだから俺と平沢の分の券も買っとけ、金は後で返す」

「ああ。頼むぜー!」

自転車に乗り平沢のほうへと走り始める。

残り6分・・・駅から後半辺りの場所に平沢を見つけた。

「早く走れ平沢ア！」

「荷物があって、しんど・・・い・・・」

そんな事じゃねエかと思ったよ・・・めんどくせエな

「俺の自転車を使え。シヨルダーバックは俺が持つからお前はギタ―を背負ってさっさとさきに駅に行け」

「りゅうくんはどうするの!？」

「俺は走って行くから早くしろ！」

自転車のイスの高さをある程度低めにして平沢にわたす。

「わかった！」

そう言って平沢は自転車でさきに走っていく。

・・・俺も行かねエとやべえな。シヨルダーバックは肩で担げばなんとかなるだろ。

その後ギリギリで駅に間に合い今は列車の中でしゃべり始めている。

「はぁ〜！何とか間に合った〜！」

「あれだけ寝坊しないように言ったのに」

「へへっ、ごめんりっちゃん。ワクワクしてうまく眠れなくて〜」

「まったく小学生か〜」

「いや、そうでもないみたいだよ？」

今寝ているのはムギと龍斗の二名。

ムギは平沢達と、龍斗は一人で後ろの空いていた席に寝ている。

「ムギちゃん・・・夢だと言ってたもんね♪」

「っふふ」

「」「ん？」「」

「ふふふふふ、ゲル状がいいの〜♪・・・」

（ゲル！？）

そこに疑問を持つのは秋山だけのようだ。

「どんな夢見てるんだろ〜♪」

「よし！写真に収めようぜー！」

「よしなよー可哀想だよー♪」

そう言う割には平沢も楽しんでいる。

「思い出し出ー！」カシャッ！

そして機械音とフラッシュと共にムギの寝顔をデジカメに収める。

「……………んん……………あ、ごめんなさい」

どうやら機械音で目を覚ましてしまったようだ。

「ほら起きちゃったー！」

「へへ、悪い悪いー！」

「そういえば龍斗は？」

「あ、龍斗ー？」

呼びながら後ろの席のほうを見ると

「……………」

「どしたのりっちゃん？」

「いや……………一瞬別の人かと思ってビックリしたぜー」

「え?・・・あ、りゅうくんも寝てる」

さっき走った疲れで寝てしまったようだ。

「人の寝顔って素直だな」

「うん。あ、りゅうくんのも撮ろうよ!」

「お、いいなー!では・・・」カシャツ!

「おい。何してるん・・・龍斗か」

「龍斗君も楽しみにしてたのかしら♪?」

「いやさっき走って疲れただけだと思う・・・」

俺が寝てる間にこんなことがあったのを知るのは後ほどだった。

— 18 — (前書き)

来週でテスト週間が終わる・・・(TT)更新遅れ気味ですいません。

合宿編中間です。感想、指摘あったりするとうれしいですm
し m

「りゅうくん。着いたよ」

声から平沢だと眠たいながらも認識しつつ、揺らされる事に少しイラつく・・・寝てたのか

「揺らすな・・・」

「あ、やっと起きた」

どうやら目的地の駅まで着いたため平沢が起こしてきたようだ。

「龍斗早くしろー」

目を擦りながら声のほうを見るとすでに列車の降りている田井中達が見えた。

「・・・ハア。めんどくせエ」

睡眠不足ながらも横に置いてあった荷物が入っている鞆とギターを持って電車が出る。

そして歩くこと数分・・・

「でっけー！」

「おおー！」

目の前には一軒家5〜6個分ほどの建物が・・・別荘だからか？だとしても大きすぎるだろ・・・。

「本当はもっと広いところに泊まりたかったんだけど、一番小さい所しか借りられなかったの」

「一番小さい？・・・これで？」

「金銭感覚狂ってやがる・・・」

一番小さいと言うのにそうとはまったく思えない別荘とこの別荘を一番小さいと言う琴吹に驚きながらも中へと入っていく。

「おおー！すげー！」

「ほわぁー！広ーい！」

多分6人ぐらいいても窮屈と思わせないほど広いリビングに天然＆デコは大はしゃぎ。

「ん？あれは・・・」

「・・・高級そうなフルーツだな」

秋山の目線にはテーブルに置かれた数々のフルーツが綺麗に置かれていた。

「あ、ごめんなさい。何もしておかなくていいって言うておいたんだけど・・・」

どうやらこれらは琴吹の召使いとかそういうのがやってくれたようだ。と理解していると急にばんっ！と扉を開ける音がしたのでそっちを見てみる。

「ここは何だー！！」

「おおー！お姫様ベットー！」

まさしくお姫様ベットというのがふさわしいベットが置いてあった。

次は冷蔵庫を開ける。

「えいやっ！！」

開いた先にはおそらく黒毛和牛と思われる肉の塊がこれまた綺麗に飾られている・・・一度は手をつけてみるのもありか？

「うまそー！！」

「／／／！！」

平沢は声もでないのかただ感動している。

「ごめんなさい（TT）」

「・・・泣くなよ」

「私は普通のお泊りがしたいのに・・・」

「あいつらは楽しんでるんだから別にいいんじゃないかねエのか？」

「そうかしら（TT）？」

「いや・・・だから泣くなっつの」

金持ちの考えはよくわかんねエな・・・。

そしてここに来た本来の目的である軽音部の練習する場所へと移動する。

何故か平沢と田井中の姿がないため、後の俺と秋山と琴吹で移動している。

「いつもなるべく普通にしたいって言うてるんだけど、なかなかわかってもらえなくて・・・」

あれで普通だと思ってるんだから召使い共に琴吹の普通が理解できるはずもねエわな。

「どうぞ。しばらく使っていないからちゃんと動くか心配だけど」

「・・・うん！大丈夫そう！」

部屋に入り秋山がアンプ等の確認をして安心する。

つうか使ってなかったって言う割には綺麗だな・・・結構広いシアンプ等の傷も埃もほとんどねェし。

「あれ？唯と律は？」

「・・・さっき別の部屋に走っていったが」

「はぁ。しょうがないな・・・」

そう言いながら秋山が鞆から赤色を基調とした四角型のラジカセを取り出す。

「な～に？それ？」

「ああ、これ？」

そして秋山がラジカセの再生ボタンを押すと

『♪！♪！！』

ライブなどでありそうな激しい音とボーカルの声が流れ始める。

つかボーカルが完全に発狂してるんだが？

「・・・昔の軽音部の学園祭でのライブ。この前部室で見つけたんだ」

「上手・・・」

確かに俺らみたいな初心者と比べると正直比にならねェ。・・・そ

れより

「これっていわゆるヘビメタって奴じゃねエのか？」

昔の軽音部ってヘビメタ系だったのかよ・・・。

「確かにそうだけど・・・私達より相当うまい」

「うん」

「なんか・・・聞いてたら、負けたくないなって思って・・・」

「それで合宿って言い出したのね」

「うん・・・」

つまりこれを聞いて今のままではいけないと思い合宿をしようとしたわけか・・・正直どうでもいい。

「・・・負けないと思う」

「・・・！」

（・・・ただのひ弱なお嬢様じゃねエみたいだな？）

「私達なら」

静かに、だが力強く琴吹がそう言う。

「…………ムギ「よーし!! あっそぶぞー!!」

「Oh!! Yeeei!!」

「って早!? 練習は!?!」

シリアスな空気を一瞬で崩したのはいつの間にか水着に着替えて勢いよくドアを開けた平沢と田井中。……つかデコ、その手に持つてるオモチャの銚は何だ?

「先行ってるから、3人とも急いでね〜!」

そしてアホ2名は海のほうへと移動していった。

「……………これでも?」

「え、ええまあ……」

「ハア……」

「おーい!!」

「早く〜!!」

呆れ返っているとまだいたのか平沢と田井中がさっさとこいとコール。つか誰のおかげで軽く放心状態になってると思ってるやがる……。

「ちょっと待ってて〜!。濡ちゃん、龍斗君。行こう?」

「ええ！？ムギ行くつもり！？」

「せっかくだし、少しぐらいなら。ね♪？」

「え？・・・でも、私は「ムギー！行つくぞー！」

「はーい！じゃあ待ってるからー。滯ちゃんも龍斗君も早くねー」

そして琴吹は平沢達のほうへと走っていった。

「龍斗はどうする・・・？」

「ハア・・・。俺達だけでやっても意味がねえし」

そう言って俺も琴吹の後を追う。

そして部屋を出るとすぐそばに平沢達が隠れていた・・・？

「・・・何やってんだよ？」

「いいから見てろって！多分もうそろそろ・・・」

田井中の視線の先を見ると半泣き状態の秋山が。

「うう・・・うううう！私も行くうう！（TT）」

「よし」

「いやよしじゃねえだろこれ・・・」

こうして軽音部の初合宿1日目は遊ぶことになった。

俺は今、岩場の上で寝転がっている。

ここの別荘は全体的に整理されてるからかはわからないが岩場が比較的平らだったのでこの上で休むことにしたのだ。

最初は平沢と田井中に――――
――

「りゅうくん！今から面白い遊びやるから一緒にやろうよ！」

「・・・何の遊びだ？」

「この誰もいない貸切状態でこそできる無人島ごっこだよ！」

「というわけでやろうよりゅうくん！」勝手にやっつけアホ「ええ、
なんで〜!?!」

ぶうぶう言ってくるが知ったことじゃねえ。

「今なら探索隊長に任命してもいいぞー！どうだー！」

「クソどうでもいい・・・」

――――
の岩場で休んでるわけだ。

（大体練習するっていうから一応軽音部として来ただけなのに何で遊んでんだよ・・・）

「ハア・・・考えるだけめんどくせエ」

ふと海岸側を見ると、田井中が水着姿の秋山を見たとたんビーチボールを秋山の顔面に投げつけていた。

（・・・アア。ビキニつつうか水着で胸が見えやすくなってるから、自分の胸と比べた結果あれか。アホらしい）

ちなみに田井中は黄色とオレンジを基調とした水着で、平沢はピンク色でひらひらが付いてる水着、秋山は黒、琴吹は白のビキニの水着だ。

俺は黒と赤がところどころにあるトランクスタイルの水着だが、どうでもいいか・・・。

（泳ぐ気にならねエな・・・泳いだのは何時だ・・・？）

確か・・・中1の夏休みに家族一緒に・・・――

――――

目の前には普通の海水浴場。午前10時ぐらいに着いたため来客数も結構いる。

「よし！泳ぐぞ龍斗！海と塩が俺らを待っている！」

パラソルとシートと水筒やいろいろな担ぎながらも俺を掴む。

「塩は最初から海に入ってるってちょー！？引っ張んなよ父さん！！」

「あまり無茶させないでよ健一さーん！」

「わかってるってー！さあ行くぞー！」

「だから引っ張るなっつうの！」

――――
さんと泳ぎで競争したり、カレーをどちらが先に食い終わるかとかしたり、途中で父さんが弱めのクラゲに刺されて（特に問題はなかった）母さんが無駄に心配してたりしてて案外楽しんだのは今でも覚えてる。

（二人とも何処か出かけることが好きだったのかよく一緒に遊んだな・・・）

本当に、あのころは楽しかったんだろう。

・・・・・・今ではその感情すら思い出せねえ、楽しかったという記

憶はあるのに。

（・・・俺って今生きてるんだよなァ。なのに・・・生きてる気がしねェ）

多分、俺は今誰も信じてないんだろオナ。

渉も、悠二も、平沢達も、それらの高校で知り合った奴らも含め誰も、誰一人として心から信頼してないのだろう。

（この人間の社会で生きる以上、表面だけは普通にしていて本心ではいつ裏切られても大丈夫な態勢・・・結局は信じてねェのか）

・・・『あの時』を境に俺は普通はあるはずの感情が欠けてる・・・

[illegible][illegible]

アア、死んどけばよかったんだ。

『あの時』に。

「・・・・・・・・チツ」

いつも一人になると考えてしまうことに対してイラつきながら舌打ちをする。

「俺は……あんたらが生きろと言ったから……今も……」

ふと昔を思い出していると、下のあたりで一氣に走る音がしたので、そちらを見るとしゃがみこんで耳を塞ぎながら震えてる秋山がいた。どうやら岩の壁に張り付いてたフジツボが原因のようだ。

（どんだけ怖がりなんだよ・・・お化け屋敷とか行ったら失神すんじゃないねエ？）

そして近くにいたのか田井中が秋山の耳元で何かを呟いている。

「うわあああああー！！！」

何を聞いたのかは不明だが秋山が叫ぶ。つうかうっせえんだよ・・・

「お、りゅうくん発見！何で急にいなくなるのさ？」

一緒に来てたのか平沢と琴吹も来ていたようで、下の騒ぎを見ていた俺に気づいたようだ。

「・・・別にいいだろオが」

「一緒に遊ばない？」

「・・・俺が入ってもつまらねえだろうから止めとけ」

つか女子は女子で遊んだほうが楽しいだろ・・・。

「そんなことないと思うわよ？ほら、せっかく来たんだし行こ♪」

（・・・！？）

そう言って琴吹は俺を引っ張る。意外に力があることにも多少驚いたが

（・・・デジャブだな）

「あれ？りゅうくんが反対してこない？」

「・・・」

「龍斗君？」

「・・・アア。考え事をしてただけだ。・・・行くならさっさと行け」

「じゃあ行こ〜♪」

「今日の龍斗君は素直ね〜」

「・・・そりゃ悪かったな」

こうしてこの後海岸あたりまで戻ってきて海で競争させられたりビーチボール投げしてたり、無駄にクオリティの高い砂の城があったので「何だよこれ？」と聞いてみると琴吹が作った物らしいと判明したりとまあいろいろあった。

俺はそこまで遊んじやいねエがな・・・。

「あ〜海水飲んだ〜！」

「たどり着いたぞ！黄金の島ジパング！！」

今はもう夕日が昇り空がオレンジ色に染まっている。

そして意味不明なことを言いながら田井中と平沢が砂浜で大の字に寝転がる。

「まだまだ〜！」

「あ〜」

「おお、いつのまに！」

そこにここに来た目的も忘れていたのであろう秋山がスイカ丸々一個を持ってきた。

スイカ割りでもするつもりか・・・？

「せっかく海に来たんだから思う存分遊ばないところまで来た意味が・・・・・・・・」

「「「？」」」

秋山と俺は立っていて、後3名は砂浜に座りながら秋山を見る。

しばらくの沈黙の後・・・

「あーーーーー！！！！練習！！！！」

「忘れてたのかよ」

田井中もちよいあきれ気味に呟く。

「マ、マッタク・・・律ガ遊ボウトカ言ウカラダゾ」

言い返せないことがわかっていいのか、言い逃れにしか聞こえない棒読みの戯言を吐く秋山。

「一番楽しそうに遊んでたのは誰だ・・・！！」

「ツーン」

もう言うこともなくなったのか初めて聞く効果音らしき音をだす。

この合宿の主催者お前だろオが秋山・・・。

— 19 — (前書き)

テスト週間が終わったと思えば終わった日にバイト、今日もぶっ通しバイトでなかなか更新できませんでした。急ピッチで書いたので間違いあるかもしれません。

合宿編中間あたりです。

一別荘内 リビングー

とりあえず本来の目的を思い出した秋山により練習することになったが、それぞれ海が楽しかったのか遊び終わったとたんに食欲がきた為食事をする事になった。

「・・・で、誰が飯作るよ？」

水着から着替えた俺達は夕飯をどうするかを決めることに。

「私がやろう！」

勢いよく手を上げ宣言してきたのは田井中。

「お前料理できるのかよ・・・」

「家ではそれなりに作ってるからなー。普通ぐらいには出来るぜ」

「あっそ」

「反応薄・・・」

そもそも他人に興味がねえし。

「りっちゃんすごいねー！」

「そうそうそういうの待ってたんだよ！さすが唯！」

「えへへ／＼」

照れる要素が何処にある・・・

「じゃあ作りますか」

「おおー！」

「・・・肉は俺にやらせろ」

「お、龍斗が乗り気とはめずらしい」

「見た時に手をつけてみようと思ったただけだ」

・・・料理は俺の、唯一の趣味みたいなものらしい。

料理をしていると俺は何故か落ち着くみてェだ。理由は本当にわからねェがな・・・。

「じゃあ料理人もやる気みたいだし作るぞー！」

「「「おおー！」」」

「・・・誰が料理人だオイ」

だが気にするだけ馬鹿みたいなのでさっさと作ることにした。

―別荘内 練習場のスタジオ室―

「あーお腹いっぱい」

「床が冷たくて気持ちいい／＼。こうやって目を閉じてると、なんか波に流されてるみたいな感じするよね？」

「あ、ほんとだ／＼」

「お休みなさ／＼」

「お休み／＼」

「始めるぞー！」

「二人とも起きてー！」

「ZZZZ」

夜食も食い終わり練習するはずだったが、食べて満腹になり眠気と

海で遊んだ疲れが襲ってきたためだろう平沢&田井中が床で寝転がり始め寝る始末。

「ああ・・・」

「ムギ。ちよつとどいてて」

すると秋山はベースに繋げてあるアンプを平沢達の前に置くと、ベースを構え

『—————！！！！』

ベース特有の低い音ながらもアンプを通して大音量で流す。

「「うう・・・」」

一応離れている俺と琴吹にはそこまでダメージはないが、至近距離で流された平沢らが目覚めるぐらいのダメージはあったようだ。

・・・練習すんならさっさとやってほしいんだがな。

強制的に起こされた平沢と田井中もそれぞれの位置に着き、秋山がベースの調整をしていると

「なー？今日はもう止めにしようぜー」

「練習が目的でここに來たの！」

「その本人が一番楽しそうに遊んでたんじゃねエのか？」

「ふ、普通に遊んでたぞ！」

「私よりも楽しんでたのにか？」

田井中が俺の言葉に乗ってくるようにニヤつきながら秋山に問う。

「それはそれ！とにかく練習するの！」

問題をうやむやにして目的を押し通す秋山に、呆れつつギターの調整をする。

「ちえー」

「・・・！」

ふと秋山が何かを閃いたような顔をして

「そういえば律々？最近太ったんじゃないか？」

「えっ？」

「特にくお腹の辺りとかく」

「ええ！？」

田井中が叫びながら自分の腹を確かめ始めた。

「最近ドラム叩いてないからかな？」

「!!!!!!」

その言葉を聞いた瞬間、田井中が「オギャー!!」とか叫びながらとにかくドラムを叩き始め、その様子を見て秋山が計画通りといわんばかりの顔をしていた。

こいつ・・・幼馴染だけあるのか田井中の操作方法知ってやがる。

「もう、ギター持てない」

「ええ!？」

そう言ってギターをスタンドに置き、またもや床に座り込む平沢。田井中は何とかできたが平沢の対処はできなかったようだ。

「だってこのギター重いんだもん」

「だから軽いやつにしておけっていったのに」

「誰だ! コノギター買ウツテ言ツタノハ!」

「お前だ!!」

「ハァ・・・。買うんじゃなかったな・・・」

金が無駄になったじゃねエか

「そこはちゃんと感謝してるから大丈夫だよりゆうくん!」

「・・・・・・・・・・」

・・・言う言葉がねエ。

その後の事は正直予想できるだろオが一応話そう。

平沢がダウン⇨田井中も釣られてダウン⇨練習ができない⇨そこから何故か学園祭の話に移行⇨田井中による「秋山がメイド服を着るとどれだけ似合うか」討論がおこなわれ、その話で自分のメイド姿でも想像したのだろう秋山が田井中の頭へ渾身のクリティカルアタック（拳骨）⇨練習不可能？となり息抜きに外へ。

そして今へと至るわけだ。

外は暗く夜空がよく見える時間に

「終わったら練習するからな」

「・・・お前何時スイカ切りやった」

別荘の広場で俺とスイカを食っている秋山は座り、田井中と琴吹はいつの間にか並べた大型の花火の左右でしゃがみながら待機。

「わぁかってるって」

田井中は琴吹へアイコンタクトを送り

「うん！」

（普通の奴らが見る夢ってのはこういうのなんだからか・・・？）

俺には似合わない、いや……

(混じれない)

そんな気持ちにさせるほど、綺麗で、夢い光景に俺は見えた。

—side—
秋山
濤

律が息抜きに外にでようだなんて言うから何をするのかと思ってたけど

「せいの！」

[illegible]

(
•
•
•
•
•
綺麗)

花火が上がってからはこの光景に目を奪われて、この中で演奏している唯も何故かすごく輝いて見えた。

それからある程度見続けていると花火が切れてしまったようで幻想的な景色が消える。

「O＼Yee i O＼Yee e i!!・・・あれ!?!もう終わり!?!」

「予算がなー」

「いつかまたやりましょ?」

「そうだな。武道館公演で、ババババーン!!っと!」

「武道館?」

唯、私達の目標忘れちゃってるし。

でも唯らしいかな?

「おいおい……。目標はそこだって決めただろ?・・・な?」

「え?」

急に律が私に話を振ってきたことで

(そういえば軽音部が結成された時に、ホワイトボードに「めざせ!武道館!!」とか書いて律と私で盛り上がったたっけ)

それがなんだか楽しくて楽しくて

(まあ、唯と龍斗はあんまり興味なさそうだったけど)

こっちを思い出すと少し苦笑してしまう・・・そうだ。

「じゃあ〜その時はピンクがいい!」

「アハハ、小学生かよ・・・」

「だって〜可愛くない?」

「ガキっばいだろ」

「つうかこいつは完全にガキとかわんねェ」

「私もピンクはちょっと・・・」

「え〜そうかな?・・・ってりゅうくんそれはひどいよ!?」

「・・・そう思うなら一度自分を見直せアホ」

私は横に置いておいたラジカセの再生ボタンを押して、昔の軽音部の演奏を流す。

『♪ー!♪♪ー!』

音に気づいたのか唯達がこちらを向く。

「武道館目指すなら、まずこれくらいできないとな?」

「へーうまいなー」

「あれ?でもこの曲・・・」

『♪♪ー!♪♪ー!・・・お前らがくるのをまっていたあ・・・』

それを聞いて安心したのか秋山が顔を上げ始める。ここまではよかったが

「・・・ほんとお／＼／？」

泣いているのか我慢しているのか・・・まあ男に見せればゴキブリホイホイと同じ効果でもありそうな顔をしているようで

「「萌え萌え〜キュン♪」」

秋山に胸あたりで腕を交差して一度両手を大きく回し、もう一度胸辺りに腕を戻しつつハートマークを手で作りながら意味不明な言葉を放つ平沢と田井中。

（女子にキュンとさせる効果があるなら威力？は大きいんだろオナ・
・あのバカ（悠二）がうまく引っかけってくれる気がする）

・・・それを見てもなんとも思えない俺も俺なのかもしれねエがな。

— 20 — (前書き)

最近遅れ気味です・・・少し休憩してちゃんと書くべきでしょうか？間違いありました指摘お願いします！

合宿編後半です。どうぞ／

「うう・・・(TT)」

「ごめんなー滞」

「ぶう」

「ああ・・・」

今はある程度回復した秋山を回収しスタジオへと戻ってきて、田井中が子供のようになねる秋山をなだめようと頑張るが、未だに機嫌が治る様子がない状況にある。

主催者。今日は再起不能かこれ・・・？

俺と平沢と琴吹は一応スタンバイしているんだからさっさとしてほしいがな。

「唯ちゃん。でもほんとにさっきの曲・・・」

「うん！ちょっとまってね」

・・・さっきの曲？

どうやら琴吹は知っているようなので聞いてみることにする。

「琴吹。何の話だ？」

「唯ちゃん、さっき滞ちゃんが流した曲覚えてるって」

「それってチョーキングのことじゃないか？」

そういえば一応練習用買ったギターの基本が書いてある本にそんなのがあったな・・・たしか

「チョーキング？」 「うう」

「違う」

田井中がそう言って平沢に軽めなプロレスのほうのチョーキングをしだした。軽めでも首は絞められているようで平沢からはうめき声が発せられる。

「チョーキングって言うのは、音を出しながら弦を引っ張ること。龍斗ってチョーキングできる？」

一応ギターだし覚えてはいるが・・・振ってくんないめんどくせえな

「・・・覚えてはいるけどよ」

「じゃあちょっとやってみて」

めんどくさいながらも、ギターを構えて最初に弦を弾いて音を出す。

そして弾いた弦を上へ押して引っ張るとギターの音で「ミヨーン」と鳴る。確かこれでよかったはずだ。

「わぁー。これがチョーキングなんだねー」

「わかったならお前もやってみろ」

「ほゝい」

次に平沢がギターを構えると、俺がやった時と同じようにギターを弾く。

「これでゝ・・・こお？」

そして弾いた弦を引っ張ると、さっきと同じくチョーキングの音が出た。

「そうそう！」

「ププッ」

「へ？」

秋山が褒めた後、理由はわからないが平沢が笑い始める。秋山も急に笑い始めたことについていけず間拔けな声を出した。

そんな俺達の心境など関係無しに平沢がギターを弾きチョーキングを繰り返す。

・・・ついに壊れたか天然？

「アハハハハッ！あゝこれなんかへゝん！」

「え？変って・・・」

「ツボだったみたいだなー「フジツボ!」?」

どうやらチョーキングの音にツボっただけのようだ・・・最初精神障害にでもなったのかと思ったがな。

田井中の発言によってそんな疑問が解決したと同時に、今度はツボと言うキーワードからフジツボを想像した秋山がしゃがんで耳を塞ぎ震えてしまった。

わざわざめんどい状態にさせんじゃねエよ幼馴染・・・。

一別荘内 入浴場一

あの後はいしばらくして秋山も再起動し、ある程度普通に出来たため今日の練習は無事終わった。

そして練習が終わると、まだ風呂に入っていなかったため俺達は――
――
――
――
――

「ムギ!ここに露天風呂があるのは本当か!」?

「ええ♪」

「早く行こうよりっちゃん!」

「わかってるって！・・・そういや龍斗はどうする？混浴は無理だしなー」

そう言いながら田井中は秋山のほうを見る。

「こ、混浴／＼！？」

「いや一緒に入るわけねェから落ち着け・・・後田井中、テメェ俺使って秋山をいじるな」

「わるいわるい」

秋山のめんどくさい性格には毎回呆れさせられる。

（つうか俺が女と一緒に入るとかねェワマジで。それよりもここの中で待つこと自体が危険すぎる。ここの別荘の造りは窓が多い、つまりあいつらの入浴姿は少し窓際に視線を送れば見えてしまう状態にある・・・そんなことでHENTAIという汚名をもらうのはまっぴら御免だ）

なので問題解決のため琴吹に聞く。

「琴吹、別荘内にも風呂は「ありますよ♪」・・・そうか」

そんな不安は一瞬で解消されてしまった、よかったにはよかったがな。

「よし！じゃあ私達は露天風呂に行くぞー！」

「じゃありゆうくん後でねー」

そう言って平沢達は露天風呂へと向かっていった・・・と思いきや田井中が俺のほうに戻ってきて

「覗くなよー」

ニヤニヤしながら俺に言ってきた。わざわざそんなくだらない事を俺に言いにくるあたりにイラッとしたので

「お前みたいな貧乳、誰か覗くんだよ？（笑）」

相手のコンプレックスらしきところと一緒に皮肉で返した。別に胸の大きさなど本心ではどうでもいいことだが

「なっ!？」

コンプレックス的には当たってはいたようで幸いだったことから、ある程度はストレスも解消されたためさっさと入浴場へと移動する。

途中「これから育つんだー!!」と、後ろから捨て台詞が聞こえたが知ったことじゃねエ。そもそも大きくなるかはわからねエだろ・・・。

――――
あり今は一人で入浴中。

「・・・眠イ」

浴槽に入りながらも眠気が襲ってくる。

最初は普通の風呂場かと思ったが、室内はコンビニ並みの広さ、シヤワーは温泉と同じぐらい設置され、浴槽も普通に温泉でありそう
な広さであることからその場で一人というのはかなり静けさを感じ
させる。

まあ・・・これぐらいのほうが落ち着くがな。

(・・・・・・・・・・・・・・・・)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・眠いからか何も浮か
ばない？浮かべない？

・・・そんなことももうどうでもよくなった。

手を動かそうとすると動かせる、じゃあこの手が千切れたらどうな
るんだろう

・・・手首から血液が流れでるだけだ。

だったら神経だけ引き抜いたら人間はただの肉とカルシウムで形が
ある存在になるんだろうか？

そもそも何で人間には感情という不可確定要素が備わっているのか、

・・・考えるだけ疲れる・・・わかるはずもないのだから。

(・・・その答えはいつも出ない。すべて曖昧で終わる)

俺は、とつくに考えることも止めたのかもしれない・・・何かを
追求するとかしなくなってる。

・・・・・・世界、

他者、

人生

好み

自分、

意思、

想像

生き方

未来

・・・・・・すべてにおいて興味がなくなったのだろうか？

（今興味があると思えるのはせいぜい・・・料理ぐらいか）

1つでもあればいいほうか。人間は何かやりたいことがなければ生
きる希望もなくなるからなア・・・

そんなことを考えているうちに10分ほど経っていたので

「・・・出るか」

入り口あたりにある更衣室で、持ってきていた黒色と少し白の混ざったデザインがそれなりのNIKEのジャージを着てリビングへと歩く。

もともと運動用に冬に買った物なので、長袖長ズボンという今の季節である夏には正直きつい。なのでズボンはジャージ、上はちよい派手な黒色の半そでシャツを着ていくことにした。

ーリビング PM9・・43ー

さすがは金持ちといえる大型の薄型液晶テレビで暇つぶしにニュースを見ながらソファで寝転がる。

さっきの風呂で眠気が飛んでしまったので、今こうして眠くなるの

を待っているのというわけだ。」

平沢達はすでに寝る用意をしていて一さすがに一緒にねるわけには
いかなないので俺はリビングのソファで寝ることにしたーリビングに
は俺一人というところもあるのか軽く放心状態に近い状態でテレビ
を見ている。

「りゅうくん寝ないの？」

・・・毎回ニュースを見て思うが、何で殺人事件とかはいつも流さ
れるんだろオカ？

「？。おい」

こんだけ頻繁だと気づかれていない殺人事件なんていくらでもあり
そオだな・・・数年後とかに掘り返される事件などもあるし。

「りゅうくん？」

後はレイプ系の事件も絶対にあるはずだが、それが個人のプライバ
シーにより放送されないのも含めると、相当あると考えられる。

「りゅうくんってばー！」

「・・・ア？」

考え込んでいると急に大きな音がしたことで意識を戻す。前には平
沢がいた為

「邪魔だ。テレビが見えねエ」

「りゅうくんが無視するのがいけないんだよ。さっきから目の前で手振ってたのに」

どけようとしたが、俺のせいにされ否決となった。やっぱりこいつめんどくせエ・・・後ぶうぶううっせエ。

「そりゃ悪かったな。で、何のようだ？」

「りゅうくんは寝ないの？って聞いたんだよ？なのに無視するから」

「さっき風呂入ったおかげで眠気が飛んじまったんだよ・・・」

「あ、じゃありゅうくんも枕投げする？」

「・・・今は布団敷いてるんじゃないのか？」

「そうなんだけど、途中で枕投げやろうってりっちゃんに言われて」

ある程度は準備したが、枕を見た田井中が好奇心に負けたと・・・どうでもいい。

「それでちょっと休憩にお茶を飲みに来たんだ」

「あっそ・・・じゃあ飲んだらさっさと戻って寝とけ」

「えっ！せっかくのお泊り会なんだからまだまだ遊ばないと！」

「ここにきた本来の目的は? 「海!」 ……ハア」

やっぱり遊ぶことしか頭になかったかこいつは……。合宿とか言う割には初めて演奏を合わせた事以外では部室でも練習できるし、ほとんど遊びが目的になってるなこれ。

それから平沢がコップにお茶を入れて俺の隣に座ってきた。俺は特に話す気もないのでさっさと行けよと思いつつ黙っていると、平沢が問いかけてきた。

「ねえ? りゅうくんは楽しい?」

「何がだ?」

「みんなとこうして遊んだり演奏したりすること」

「……さあな」

正直どうなのかわからねんだよ……。楽しくないのか、楽しいと感じれないのか。多分後者だろうけどよォ。

「私は楽しいよ♪。海でも楽しかったけど、さっきの練習でみんなと合わせた時はもっと楽しかった♪」

「そりゃよかったな……」

「うん♪。だから、りゅうくんもちゃんと楽しもう、ね?」

「……そうだな」

平沢に言われるとわ・・・こいつ、ただの天然バカじゃねエのかもな。

そしからお茶を飲み干した平沢がソファから立ち上がり

「・・・あ、後りゆうくんって胸が大きい子が好きなの？」

「・・・・・・・・ハ？」

唐突に話が持っていかれたため一瞬思考が停止^{フリーズ}。そもそもそういうことに鈍感そうなお前が聞いてくるとは思わなかったし・・・。

「だって温泉入る前に貧乳なんて覗かないって言ってたよね？」

アア、そのことかよ・・・つうか

「・・・何でそんなこと聞いてきやがる」

あれは田井中に皮肉として言った事だぞ・・・それをなんでこいつが。

「男の子ってやっぱり胸あったほうがいいのかなく？って思ったら・・・そのく／＼／＼」

俯きながら自分の胸元を見始める平沢・・・アア、そういうことか。

「胸が小さいから悲しくなったのかよ」

「うつ・・・やっぱり私も小さいかな／＼？」

「まあ秋山とかと比べたら小さいんじゃない」

「うう・・・」

真実を言うたびにどんどん落ち込んでいく平沢。地雷だったか？別にすごく小さいとかじゃないと思うが・・・。さすがにこうなると後処理がめんどくさそうなので、今のうちに治す事に。

「言っではおくが、俺は別に大ききなんて興味ねえ。勘違いすんな」

「・・・本当？」

「田井中に言ったのは皮肉で言った事だ。本気で言ったことじゃねえし。それに男が全員巨乳が好きってわけでもねえからそんなに気にすんじゃないよ・・・」

「そっか。それならよかった・・・」

回復したのか平沢がホッと胸を撫で下ろす。確かにそんなに大きくはないだろうが田井中よりはあるだろ。

まあ何でそんなことを聞いてきたのかもわかったので少しは俺もスッキリしたかな。

「じゃあ私は枕投げに再戦してきます！りゅうくん。もし生きて帰ってきたら・・・おいしい料理を作ってください」

「死亡フラグ確定したぞお前・・・」

— 21 — (前書き)

最近精神的にスランプ？状態で……。1月にはマイパソ買えるはずなので、書く時間も増えてくれることをと期待しております（自分）。

顧問編前半です。

夏休みも終了し、今はまだ暑さが抜けない9月上旬。

冬とは違い、いくら脱いでも暑さを遮断できないこの季節にイライラしながらもなんとか平常心であろうと我慢はしたが

「・・・・・・・・・・」

さっきの時間に体育があったおかげで、今は机にうつ伏せになりながら休憩。

各教室に設置されているクーラーのおかげでこの中だけは涼しく、今の時間は日差しも当たらない為休憩にはちょうどいい。

「龍斗く？寝てるのか？？」

「・・・・・・・・・・」

上辺りから悠二の声が聞こえるが反応する気もせず無視した。

「んく寝てるのか？！！これは今までのお返しをするチャンスじゃないか！？」

アア？

「聞こえてんだよクソ野郎オ」

「ヒツ・・・！いきなり声だすなよ・・・」

「黙れ話しかけるなイラつく」

「おお…そこまで否定するのかい龍斗や」

「ジジイ口調になってもウザさは変わんねェし黙れつつってんだろオが」

「Ohゝこりゃ完全にイラついてるな。やっぱこの暑さか？」

「……わかってんな最初から黙ってろよ」

「まあまあゝ」

部活をやってこなかった俺には地味に来るこの暑さ是不快以外の何者でもない。

こいつは部活で慣れてるのかピンピンしてるしよオ。

「つか何だ？俺になんか用でもあんのか？……気まぐれとか言ったら殺す」

「そのテンションのせいかな「殺す」がマジに聞こえるんだが（。…。）。」

「凶星かよ」

実際に殺す気はねェしそもそも労働力の無駄だ。後処理もめんどくせェし。

「ま、まあもうそろそろ先生も来るし帰りの準備しようぜ！」

「アア、そういうやもうこんな時間か・・・渉はどうした？」

「今係りの仕事で提出物の回収中だぞ。何だかんだ言っても仕事はしつかりやるからな」

「さすが・・・」

（やっぱり根元から委員長キャラか、あいつは）
そう思いながらも机の取っ手に掛けてある鞆をとり、帰りの準備をする。

いいか)

金を入れてボタンを押し、ガコンっと自販機から音がしてからしゃがんでサイダーを掴む。

「お、古川じゃん。お前もなんか買いに来たのか？」

「アア？・・・桐生か」

たしか同じクラスで、最近はずっと話すぐらいにはなってるな。ほとんどこいつから話しかけてくるけど。

「桐生ですよ。こんだけ暑いと俺の財布から金がなくなりそうだわ」

「だったら水筒でも持ってくりゃいいだろオが」

「一応部活用にはあるんだけどやっぱ炭酸がよくてさ。大人で言うビールみたいなもんだって」

「そうかよ・・・」

やっぱり話すと疲れてくる…そろそろ行くか。

「じゃあな。部活があるんですよ」

「軽音部だっけ？行ったら」

缶ジュースを飲みつつ俺に言ってきたが反応するのもめんどいんでそのまま歩いていった。

それから数秒、龍斗が視界から消えると

「やっぱり不思議な奴だなあいつ。笑ったところ見たことないし…
一回は見てみたいってか」

そんなことを桐生が呟いて、また缶ジュースを飲む。

—音楽準備室—

手元に飲みかけのサイダーを持ちながら4階の音楽準備室前（部室前）まで来て見ると「あー！ドラム叩きすぎて手の肉刺潰れちゃった！」と田井中の声が聞こえて来て、何事かと思いながらも扉を開けてみる。

「ほれほれ」

「ヒッ・・！！」

よくわからないが田井中が無理やり秋山に手を見せていて、それを見たくないのかいつもの姿勢でしゃがみこんで耳を塞ぎひたすら見ないようになっている秋山。

もう一方を見ると長イスにギターを掛けながら人差し指の折り曲げを繰り返す平沢の姿がそこにあった。

「遅いぞ龍斗」

「龍斗…た、助けて（TT）」

「・・・その性格を直せ」

関わりたくないので無視して棚の下辺りに鞆とギターケースを置く。おそらく肉刺が潰れたということに秋山がいつもの怖がりな性格が発動でもしたのだらう。後ろからまた田井中のはしゃぎ声と秋山の悲鳴が聞こえるがどうでもいい。

「で、お前のその指はどうした？」

さっきから少し血が出ている人差し指を見ながら聞いてみる。

「ギターの練習してたら切っちゃって。りゅうくん絆創膏持ってない？」

「いや持ってねエ…保健室にでも行って来い」

「んゝそうするゝ」

「ガチャッ」

突然音楽室に繋がるドアから、たしか山中さわ子とか言う名前だったと思われる教師が入ってきた。

「ごめんねゝ」

「ん？」

平沢も今気づいたようで山中のほうを振り向く。

「譜面台を借りにきたんだけど…あら？」

平沢の指の傷を見た山中さわ子は

「絆創膏、いる？」

そう言った。

山中が「でも絆創膏は私の机にあるから…平沢さんもいっしょにくる？」と言ったため平沢も付いて行った。

今この音楽準備室にいるのは、俺と目の前で未だに同じことを繰り返している田井中と秋山・・・正直関わりたくねエ。

「……………」

すでに秋山が無言で泣きながら殻に閉じこもっているところを見ると、後々再起不能になるのではないかと思った。

まあそれでもどうでもよく。

そんなことを思っていると、田井中がやることはやったみたいな顔をしながら机に座る。

まだ琴吹は来ていない為お茶などは置かれていない。

自分で入れようと思えばセットは部屋にあるので入れれるがな。

「ムギはまだかー」

「秋山放置かよ・・・」

「そのうち直るから大丈夫だって」

「そうかよ。つうか練習はしねエのか？」

「さっきまでしてたんだけどなー。滯があんな感じだし」

「そうさせたのはお前じゃね？」

「違うって。唯の指が切れたのを見た時からこんな感じだったし」

「それをさらに悪化させた」と

「おおむねあってますわん♪」

こいつ本当に部長か…？

まあ考えるだけ無駄と思いさっき買ったサイダーを飲む。

「あー！私にもジュース頂戴！」

「ねエよ自分で買いに行け」

「部長の私にジュースを買ってこないなんてありえない！」

その考えがありえエし。

「どういう思考してるんだお前…」

「しかたないだろーこんだけ暑いと喉が渴くんだー！」

当然のように置かれている元々あったガラス張りの棚に置かれた琴吹持参の高級そうなカップや皿の数々。

部として認められていないのに好き放題に演奏し、好き放題にティ―タイムをしている存在しない軽音部とその部員。

「あっ…」

「うっ…いい、今まで何も言われなかったから、大丈夫だよー!…きつと」

「俺がここの教師だったら間違いなく追い出すなこの状況」

「そんなぐりゅうくん先生それだけは…!」

「悪乗りしてくるな…」

「それより、どういう理由なのか聞きにいかないとなあ」

「そうね」

とりあえず、やるべきことは決まったただけマシか。

「あれ? そういや滯は?」

「あ、滯ちゃんならあそこで

平沢がそう言いながら未だに回復していない秋山を指す。

まだ怯えてる」

「帰って来ーい!!」

「加害者が言うのかオイ」

その後秋山を強制起動させて、何故軽音部が部として認められていないのか知るべく生徒会室へと向かうことに。

てか生徒会ってことは渉と真鍋がいるんじゃない？

— 21 — (後書き)

オリキャラ紹介

桐生 徹 きりゆう わたる

身長…170cm

顔は上の下？ぐらいで、髪の毛は少し長めでストレート。だがワックスを使用しているのか癖毛のようなふんわりになっている。

龍斗のクラスと同じ同級生。

今年からできたサッカー部に所属。

性格は普通な感じでそこまで特徴はないが、誰に対しても平等に話す世間的にいういい奴。

それゆえにクラスの誰とでも話せて、龍斗とは体育でのチーム戦で話すようになった。

ちまちまとオリジナルは増えるかもしれせん。
だいたいモブキャラですが。

— 222 — (前書き)

最近ギルティクラウンにはまってしまっていてサボっていました（、
、1111）

そのうちギルティクラウンの二次作品も作ってみようかと検討中だ
ったり。

もちろんこの小説も止める気はないのでこれから書かせていただ
きたいです（――）。（止める場合ははっきり書きますので（
（（；。D。））））

顧問編中間です。

—生徒会室—

あの後、何故軽音部が部として認められてないのかを知るべく生徒会室に来てみたところまでは普通だったが

「たのも〜!」

「部長は私!」

平沢と田井中が訳のわからんポーズをしながら生徒会室に突っ込んでいく様を見て、自分はこんなやつらと一緒に部員なのか、と見られると思うと恥ずかしくなる。

「あら、唯?それに龍斗も?」

「え?和ちゃん?」

「どうしたんだ龍斗。ここに何か用でもあるのか?」

「いろいろとな・・・めんどくせえが」

「渉君も!」

思っていたとおり真鍋と渉がいたか・・・。
まだ2年などは来ていないのか中にいたのは真鍋と渉だけだ。

「和ちゃんと渉君が何でここに？」

「何でって生徒会だからだけど？」

「えっ！？すごいねーさすが和ちゃんと渉君だよ！」

本当に初めて知ったような顔をしながらの賞賛。
記憶能力が乏しいのかこいつは・・・。

「お前らほんとに幼馴染か？」

「いつもどおりだな唯は」

田井中は苦笑しながら、渉はいつもどおりだと思ったようだ。

「そーいやその男子は誰？龍斗の知り合いみたいだけど」

「ん？俺は坂本 渉。君達は？」

「私は田井中 律。よろしくな！」

「琴吹 紬です。よろしくね♪」

自己紹介とかどうでもいいからさっさと

「ああ、よろしく。で、龍斗達は何でここに来たんだ？」

・・・お前が知的でよかった。
とりあえず本題に移行するか。

「うーん・・・やっぱり、リストにはないわね」

「こっちのほうにも軽音部はないな・・・」

先ほど来た理由を説明し真鍋と渉に部活のリストファイルを調べてもらったが、やはり軽音部の書類は存在しないと言う。

「そんな・・・」

それを聞いた平沢が落胆しながら嘆き、田井中が考えるポーズをしながら険しい顔になると

「もしかして・・・」

「りっちゃん・・・！何か心当たりが？」

そこにマジか悪乗りかは不明だが平沢も険しい顔をして田井中に問う。

・・・多分人と言う身分証明書みてエなもんだよな？

部活なんかまともに入ったの現在の軽音部だけだからよくわかんねエけどよオ。

そういうのは大抵4月に渡されると思うが・・・

「部活申請用紙？」

どうやら琴吹は知らないらしい・・・渡されているなら知っているはずだが。

「渡されてねエのか？」

「ええ・・・。りっちゃんは何か知らない？」

「そんな話は聞いたことが『聞・い・て・る・だろ！！！！』」

ドスの利いた声が聞こえた方を見ると、生徒会室の入り口で真っ黒なオーラを纏っている（ように見える？）先程まで再起不能ということ以轻音部で待機していたはずの秋山が田井中を睨んでいた。

そして考えること約10秒。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

あっ、机の中に入れたままだ」

「やっぱりお前のせいかああああああああああ！！！！！！」

「イタイイタイイタイー！！」

「濡ちゃん。りっちゃんにも悪気があったわけじゃないし」

「ムギは甘いんだ!!」

「まあまあまあまあまあ」

田井中が洩らした発言により秋山が頬を思いっきり引っ張り制裁が開始し、そしてそれを宥めようとする琴吹。
つかもう部長から下りろお前^{デコ}。

「なんていうか、軽音部って唯にぴったりだと思っわ」

「ほえ？」

「俺もそう思った」

「俺のことじゃねェよな？」

この天然^{アホ}と一緒になんて最大の屈辱だっつうの・・・。

「唯のことに決まってるだろ。だけど」

「けど・・・？」

「・・・楽しそうだな。いいところに入ったんじゃないか？」

「うん、軽音部楽しいよ♪。ねーりゅうくん？」

「楽しそう・・・か。」

確かに平沢達には楽しいんだろオヨ。

「・・・うるせェだけだろ」

「またまたく楽しいくせに〜♪」

俺が恥ずかしがって紛らわしてるだけに聞こえたのか、満面の笑みでまた聞いてくる平沢。

・・・そう思ったら、この人生も何か変わってたかもな。

「ソウデスネ」

「龍斗・・・棒読みになってるぞ」

「気にするだけ無駄だ。それより今回の件、何とかならなねエのか？」

「そうだな〜確か部活申請紙の余りがまだあったと思うから・・・
どうにかできるんじゃないか？」

「そうね。問題はないと思うわ」

「」「」「ホント!？」」「」

さっきまで制裁をおこなっていたほうも真鍋と涉の会話が聞こえたのか驚いてこちらに詰め寄ってくる。

まあ何とかなるならこの件は解決・・・か。

真鍋がファイルから部活申請用紙を取り出し必要事項を記入している。

「軽・・・音部っ」と

鉛筆と机が書くことでぶつかり「カッカッ」と乾いた音をだしながら順調に記入していく。

「部員は・・・5人」

これで終わったと思った、その後に

「で、顧問は？」

「・・・ハ？」

灯台下暗しとも言える盲点に気づく羽目になったわけだ。

さっきまでこんなことにも気づかなかった俺に「平沢達に毒されすぎだ」と言ってやりたくなる。

つうかよく顧問も決めずに勝手に部活やれてたな・・・軽音部。

「」「顧問？」「」

後の四名は理解ができないのか、はたまた完全に忘れているのか問い返す。

「あんた達・・・」

真鍋は完全に呆れながらそう言った。

「まさか・・・龍斗も忘れてたのか・・・？」

「・・・そのまさかだ。・・・ハア」

この後顧問がいない以上部は成り立たないため、顧問が決まり次第また来る事になった。

—学校内廊下 e t c —

『山中 さわ子。』

我が校の音楽教師である。

その綺麗な顔立ちとやわらかな物腰で、生徒だけでなく教師の間でも人気が高い』

ただいま絶賛尾行中☆

「・・・・・・」

今変な思考が流れてきたが・・・・電波？まあ現状としてはあっているが。

俺は変人に思われる気はさらさらないので3メートルほど距離を置きながら自然に歩く。

『さらに、楽器の腕前や歌声もすばらしく・・・』

「・・・・・・あの・・・」

ファンクラブが存在するほど人気がある」

田井中によるナレーターが終了。

「さっきから何を言ってるの? (・・・;)」

山中はこの状況が理解できないようにで困りながら聞いてくる。

逆にこんな状況で困惑せずに普通に話せる奴のほうが少ないだろう。

「「先生!」」「」

「は、はい!？」

「軽音部の顧問になってください!!」

「・・・まだ、顧問いなかったんだあ」

そりゃ吹奏楽部の隣で普通に部として稼動しているのを見ているわけだから、顧問がいると思うのが普通だよな。

「先生しか頼める人がいないんです」

「お願いします」

秋山と琴吹が真面目に説得を開始。

「・・・ごめんなさい。なってあげたいのは山々だけど、私吹奏楽部の顧問しているから掛け持ちはちょっと・・・」

「そんな・・・」

「ほんと、ごめんなさいね」

平沢はそれ聞いてガツカリしているが、田井中らはこの程度で引く奴らではないだろう。

つか引き止めることに関しては強いからな軽音部委員（俺を除く）。

『今まで声を掛けてきた男は数知れず』

「だ、だから煽てても無理です!？」

「時間ならとらせません!」

「練習も、自分達でやりますから!」

「ここに名前書いて判子を押すだけ!ね簡単でしょー!？」

もはや顧問として存在するだけでいいとするか・・・平沢の時と似てるなオイ。

田井中に限ってはもはやタメ口になっていて、敬うなどという気遣いは本能により排除させられたようだ。

そもそも部活申請紙を押し付けてさっさと書け書け言ってるあたりから終わってる。

「ちよつとー!？そんな一気に・・・ん？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」ジーーーーー

俺ならイラつきそうなこの状況の中でも何とか平常心で対応している山中が、さっきからずっと自分のことを見ていた平沢に今気づい

たようだ。

「先生ってこの卒業生ですよね？」

「え、ええそうだけど・・・」

「さっき、昔の軽音部のアルバム見てたんですけど――」

「っえ!？」

・・・アルバム？

何かいけないことでもあるのか、平沢がその事を話した瞬間に山中の顔がどんどん青ざめ始め

「ア、アルバムは何処にあるの？」

「へ？部室ですけど」

「そう・・・」

そして部室のほうへと歩き始め

「?・・・先生？」

そう平沢が言った瞬間

ダッ!!

と、かの有名なウサイン・ボルト顔負けのダッシュで、おそらく軽音部へと走り始めた。

「先生!？」

「・・・練習になりそうだ」

あれを抜ければそれなりだろうと思った俺も後を追う。

「え?・・・りゅうくんも!？」

久しぶりにいい運動にはなりそうだ。

何とか3、4メートルほどまで近づけたが

(フルスピードから無駄のない動きで一瞬速度を止め、すぐさまスピードを戻して階段を駆け上がるだァ!?)

ほんとに音楽教師かよこいつ・・・!

(階段じゃこいつを抜くのはキツイ・・・次の2階廊下で距離を縮めるか)

そう思ったが山中の目の前には、ほかの教師が辞書などを収納するケースを廊下に出していて通れなくなっていた。

(・・・何であいつ止まらねんだ?ぶつかるともりか?)

そう思って少しスピードを緩めたのが間違いだった。
次の瞬間

「うあああああ!!」

その130メートルはあるのではと思われるケースをハードル跳びで飛び越した。

しかも着地も一瞬にして、また同じ速度で走り出す。

急に人が飛び越えていったことに運んでいた教師は驚いて尻餅をついてしまっている・・・が

（これは使える）

俺は運んでいた教師を軽く飛び越えて左側の壁を蹴ってさっきの速度を取り戻す。

（よし・・・うまくいった。ってオイ・・・）

今度は運び屋が折りたたみ式の長机を運び出していた。
このあたりは今整備中なのだろうか？

「「おお!？」」

だが山中はそれにも止まらずに今度は机の下に転がり、さらに受身に繋げてまた走り出す。

運んでいた業者の二名は急な出来事に呆気にとられていた。
もう音楽教師から体育教師に変われよ・・・。

（俺じゃあ、転がれば間違いなくスピードが落ちる・・・賭けだ）

今度は右側にいくつもあるブロック型の開いている窓の骨組み部分に乗り、足に力を入れ一気に前へと飛ぶ。

「おわっ!?!今度は高校生!?!」

(つつ・・・)

着地際に高く飛んだためか足に少しながら痛みが走る。

(1メートルほど離れやがった。・・・またかよ)

またも邪魔するかのごとく、目の前にはフラフープを纏めているジャージ姿の女子二名が立ちはだかる。

「「きゃああああ!?!」」

そこも山中は簡単にフラフープの間を体を回転させながらすり抜け綺麗に着地し3階へと上がっていく。

・・・あいつどれだけアルバム見られたくないんだよ。それよりも

(クソッ!フラフープ落としやがった・・・!)

今の事で驚いたのか持っていたフラフープを手放し、目の前で5個ほどのフラフープが縦に転がりながら跳ねる。

「ツチ・・・」

結局突破口が見つからず足止めを食らう事になり、山中の姿も見えなくなった・・・。

「な、何だったの今・・・？」

「山中先生？・・・だったみたいだけど」

目の前で若干驚いている女子がそんなことを話しながらふと俺のほうを見た。

この時に、さっさと行けばよかった・・・。

「あ、すいません」

一人は問題はなかった。

「！？・・・古・・・川・・・」

問題があるのはもう片方だ。こいつは

「・・・中島か」

確か中学3年で同じクラスだった奴だ。

「あ、あんたもここにいたの？」

「・・・お前には関係ねェだろ」

正直話したくもないし話す価値もないので、すでに倒れているフラフープを歩きながらまたいで軽音部へと移動する。

気分が悪ィ・・・。

— 22 — (後書き)

今回出た中島という元同級生は脇役みたいなものなので紹介はいい
ないか・・・?と思います。

— 23 — (前書き)

最近一週間更新になってますねはい・・・(T A T)
こんなんでも見てくれる人に感謝します(´，`，*)

顧問編後一回で終われそうです。

「」「い、ごめんなさい!!!!」「」

目の前に広がる視界には眼鏡を外しギターを構える目つきと性格がいつもとはまるで違う山中、それに怯えながら秒単位で土下座する平沢達。

・・・関わりたくねエ。

「だいたいなア!!!!!!」

その調子で何かを言おうとした山中がスイッチをオフにしたかのようになんて黙りこむ・・・というよりかは我に返っているようだ。

おそらくこの姿が見られなくなかった事と見て問題はなさそうだ。

その証拠に山中の顔がどんどん事態を把握し始めているのか少しずつ青ざめていく。

「・・・・・・・・今の見た？」

冷静になった山中が発した言葉は、「ばらされたくない」という意味にも聞こえる自身への死刑宣告。

そしてその自爆発言に頷く俺を除く軽音部員。

その結果は崩れていく山中のorzポーズで幕を閉じた。

「先生の時はおしとやかキャラで通すって決めてたのに・・・!」

「先生・・・」

何故かシリアスな空気が変わり田井中が山中に心配そうに呼びかける。

その空気を読んだのかは不明だが

「あれはもう、8年も前のこと」

いきなりの語りだしで、話は過去へと持っていられることとなる。

聞いたことを要約すると、こうだ。

山中は高校生の時に好きになった男へと告白した。

しかしその男にワイルドな女子が好きだと言われ結果的に振られた。当時の山中は今のおしとやかキャラのようなおとなしい性格だったらしい。

山中はと言うと、恋愛には純情だったのか、それともその男が忘れられなかったのか、男に振り向いてもらうためワイルドな女になろうと決心しヘビメタへと走るようになったそうだ。

男に振り向いてもらうために、よりワイルドな女になろうと、どんどんヘビメタへと打ち込んでいくにつれて服装と髪色の変化から厚化粧、果てには化け物染みたマントに仮面・・・

と最終的に見た目では誰だか不明な域まで達したため、もう一度男に告白した際に言われたことがこれだった。

「さわ子・・・やりすぎ」

こうして山中　さわ子の高校での恋愛は幕を閉じた。

「ふふっ。所詮、そんなものよね・・・」

（所詮そんなものだったな、そりゃ・・・）

そんなことを地面に座り込み遠い目をしながら話す現教師・・・正直シニールとしか言い様がない。

軽音部メンバーもそれぞれ呆れたり困ったり一名理解できていなかったりと反応はさまざまだ。

「先生……」

「いいの。慰めの言葉なんて」

座り込み少し涙目になっている山中に、田井中が優しく肩に手を置く。

「先生。顔を上げて」

「りっちゃん……」

そして次の瞬間、山中の両肩を掴み

「みんなにばらされなくなったら顧問やってください」

弱みを握った人間がやれる脅迫（またの名を命令）で顧問を回収した。

「今の高校時代の話もすべてこのボイスレコーダーで録音したから、拒否するなら放送で流されると思って顧問やれよ山中ア」

そこに手に収まるサイズの小型ボイスレコーダーを見せつけ脅しに参加する。

さきほど弱みになると思い、いつも他人の弱みになるものを探して採取するのに使うボイスレコーダーを使ったので本当に保存はしてある。

しかもこいつには専用のUSBケーブルもあるのでパソコン等にMP3データとしていくらかでもバックアップが可能という代物だ。

……最近の器具は人をおとしめるのに有効なのが多くて助かる。

「顧問やるからそれだけは止めて!! ね!？」

正直、こんなことにこれを使うのはやりすぎたか。

まあ放送で流され学校中に一瞬で広められるなんて言われればこうなってくれる。

「二人ともたくましい子!! ってりゅうくん何時の間に？」

「山中がキャラチェンした辺りにここに来た」

あの場面を見て最初に出た感情が「巻き込まれたくない」だったしな。

こっそり入って正解だったはずだ。

「それより気になるんだけど、何で龍斗はそんな物持ってるんだ？」

「平沢の言葉を借りて言ってやる。気にしたら負けだ」

案外この言葉は使える気がした。といった後に思ってしまった俺は何だ・・・？アホか？

「気にしたら負けとかの問題じゃなくて明らかに犯罪だと思うんだけど・・・」

やや呆れながら俺に正論を言ってくる秋山。まあ正論だと言う事は認めるが、俺みたいなのは弱みを握っとかないといめんどいことになることもあんだよ。

「ん？ ムギちゃん？」

不意に平沢が、先程から2冊の本を双眼鏡代わりにして、山中と山中の肩を掴んでいる田井中を見ている琴吹に声をかけるが周りが入ってこないのか反応がない。

「どうした？」

秋山もその様子が気になったのか平沢に聞いてみる。

「んゝムギちゃんが・・・」

「ムギ？」

琴吹に対して今度は強めに言ってみると

「わっ!？」

やっと声が意識できたのか一瞬驚いてこちらを見てくる。

・・・何故頬が赤くなってるんだこいつ？

「大丈夫？なんかボくとしてるよ。風邪？」

「えっ？あ、ううん・・・」

「？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・

何だったんだ？熱か？・・・・・・・・まさかそっちのほうとかは・・・
ねェわな。

♪♪♪♪♪!』

その後、山中にはさっそく顧問として俺達の演奏を聞いてもらった。今弾いたのは秋山が考えてきた「ふわふわ時間^{タイム}」とか言うタイトル曲で、まだ歌詞はできていないのでメロディーだけでの演奏となった。

「って感じのオリジナルなんですけど、どうですか？」

秋山が山中へと演奏の感想を求める。

「うーん・・・前ノリ後ノリとか、リズムセクションがバラバラとか・・・いろいろ気になることはあるけど

長イスに座りながら演奏を聴いていた山中は、やはり不満があるのか考えるように呟き

まず、ボーカルはいないの？」

学園祭まで残り1ヶ月を切ったというのに、未だに決まっていないところを的確に吐いてきた。

そもそも歌詞すら決まっていけないのだからボーカルをどうする、な

どと言う話が出でこなかったはずで

「「「・・・・・・あっ！」「」」」

この瞬間にその事実を知った平沢達はキョトンとした表情から思い出したような顔をするわけだ。

ボーカルのこととはなんとなく認知はしていたが、どうしてもよかったのと言ってはいない。

「じゃあ、まさか歌詞もまだ・・・・とか？」

「え、えゝとゝ・・・・」

言い訳が見つからないため頭を掻きながらはぐらかす平沢。

この言葉にだんだんイラついてきたのか山中はこめかみあたりがピクピクしている。

はぐらかす以外にいい言い逃れ方法はお前の頭では模索できなかったのかよ・・・・。

「・・・・それでよく学園祭に出ようなんて考えたわねえ？」

「すみません・・・・」

そして我慢できずに立ち上がり山中は噴火した。

「音楽室占領して今まで何やってたの！！ここはお茶を飲む場所じゃないのよー！！」

「うう、怒られた・・・」

「だいたいねえ!!」

平沢は半泣き、田井中は後ずさり秋山は震えながらもすっかりしゃがんで耐えている。

そんなに怖・・・くもないと俺は思うが先程のヘビメタ時の顔になっているためかこのような状況になっているようだ、と思考していると

「先生!!」

「アア!？」

この混乱の中、琴吹という一人の勇敢な者が鬼形相で振り向く山中に耐えながら

「ケーキ・・・いかがですか？」

「「「ええっ!？」」」

おずおずとしながらもピンク色のケーキの入った箱を差し出す。
そして数秒の沈黙をつくった山中の答えは単純に

「頂きます!!」

「「「頂くんかい!？」」」

「・・・・・・」

ケーキという欲望に負けた。

・・・女ってそんなに甘いのが好きなのかよ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2475w/>

けいおん！ -My story-

2011年11月24日21時53分発行